

付図1 遺構全体図

あ だか い せき
安 宅 遺 跡

県道駄科大瀬木線改良工事に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市は、自然的条件に恵まれ、また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺しています。市南部の竜丘地区の場合、縄文時代以来各所に先人達の足跡が刻まれており、古墳・寺院址・窯址等多く残っています。特に、古墳は、130基を超える古墳が築造されており、消滅した古墳が数々ある一方で、長野県史跡馬背塚古墳・御猿堂古墳や飯田市史跡塚原二子塚古墳をはじめ、なお多くの古墳が現存しています。これらの文化財は、私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できるかぎり現状の姿のまま後世に残し伝えることが私たちの責務でありましょう。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活のさまざまな場面で、文化財の保護と開発という相容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることも止むを得ないものといえましょう。

近年飯田市街地における開発は飽和状態に達し、周辺地区の道路環境の整備が進みつつある状況と相まって、市街地周辺へ事業所・住宅が拡散しつつあります。この竜丘地区におきましては、宅地化が急速に進行しているのに対して、道路整備が徐々になされつつあるのが現状です。特に、竜丘地区と伊賀良・鼎を結ぶ県道駄科大瀬木線と、一般国道151号との連絡は懸案の事項でありました。そうした高い公共性を有する点で、今回の開発はやむを得ないものと考えられます。けれども、事業予定地は埋蔵文化財包蔵地安宅遺跡として周知されており、本事業地に隣接する地点ではこれまでも、国道建設や民間の開発に先立って発掘調査が実施されています。本事業地でも重要な遺構や遺物がある可能性が指摘されたわけですが、道路建設により一部が壊されてしまうことになりました。そこで、次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなりました。

調査結果は本書のとおりでありまして、道路建設部分に限定されたとはいえ、奈良時代～平安時代の掘立柱建物址群の一面が調査されて、重要な知見が提供されたといえます。竜丘地区が飯田下伊那の古代史で重要な役割を果たした地域であることは異論のないところで、今回の調査結果は、地域の歴史解明の大きな手掛かりが得られたものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成7年3月

飯田市教育委員会
教育長 小林恭之助

例 言

1. 本書は、県道駄科大瀬木線改良事業に伴ない実施された、飯田市駄科所在の埋蔵文化財包蔵地安宅遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田建設事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成3年度に試掘作業、平成4年度に本発掘作業を、6年度整理作業および報告書作成作業を行なった。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・写真測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに、自然科学的な分析調査をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託実施した。なお、バリノ・サーヴェイ株式会社の報告中の1層・3層・4層……は基本層序のⅠ層・Ⅲ層・Ⅳ層……に対応する。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号ADKに中心地番1282を付して一貫して用いた。
6. 本報告書の記載は遺構の種類を優先した。遺構・遺物図は本文と併せ挿図とし、写真図版は本文末に一括した。
7. 本書はⅠ～Ⅲを馬場保之が、Ⅳを小林正春が執筆した。
8. 本書に掲載された遺構図は、佐合英治・馬場が、遺物実測は山下誠一・馬場が、また、写真撮影は福澤好晃が担当した。なお、作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集・総括は、馬場が行なった。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現は『恒川遺跡群』（飯田市教育委員会 1986）に準拠した。なお、節理面は斜線、破損部分はスクリーントーンで示した。
12. 本書に関連する出土遺物および記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路1004-1飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序	
例言	
目次	
I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	4
1. 自然環境	4
2. 歴史環境	5
III 調査結果	12
1. 調査区の設定	12
2. 基本層序	12
3. 遺構と遺物	13
IV 総括	45
引用参考文献	48
付編 安宅遺跡周辺の古環境変遷	93
パリノ・サーヴェイ株式会社	
報告書抄録	111

挿図目次

挿図1 調査遺跡および主要遺跡位置図	6
挿図2 調査位置および周辺遺跡位置図	8
挿図3 路線図および調査位置図	10
挿図4 基準メッシュ区画調査位置図	11
挿図5 基本層序	12
挿図6 39号住居址、溝址3、土坑24	14
挿図7 掘立柱建物址2	15
挿図8 掘立柱建物址3・4	16
挿図9 掘立柱建物址5～7	17
挿図10 掘立柱建物址8・9	18
挿図11 柱列址1・2	19
挿図12 囲溝址4～6	20

挿図13	溝址 4	21・22
挿図14	溝址 2・5・7・10・11	23
挿図15	溝址 8	24
挿図16	溝址 6・9・12、溝状址 3・4	25
挿図17	竪穴 4～6	26
挿図18	竪穴 7	27
挿図19	土坑18～23・25～33・46	28
挿図20	土坑34～45	29
挿図21	周辺柱穴平面図(1)	34
挿図22	周辺柱穴平面図(2)	35
挿図23	周辺柱穴平面図(3)	36
挿図24	周辺柱穴平面図(4)	37
挿図25	周辺柱穴平面図(5)	38
挿図26	周辺柱穴平面図(6)	39
挿図27	周辺柱穴平面図(7)	40
挿図28	周辺柱穴平面図(8)	41
挿図29	周辺柱穴平面図(9)	42
挿図30	周辺柱穴平面図(10)	43
挿図31	周辺柱穴平面図(11)	44
挿図32	主要遺構配置図	46

付 図 目 次

付図 1 遺構全体図

図 版 目 次

第 1 図	39号住居址 溝址 4・8 出土遺物	49
第 2 図	溝址 8 出土遺物	50
第 3 図	溝址 8 竪穴 4 出土遺物	51
第 4 図	竪穴 4・7 土坑24・31・34・35・37 遺構外出土遺物	52
第 5 図	遺構外出土遺物	53
第 6 図	遺構外 掘立柱建物址 5 出土遺物	54
第 7 図	掘立柱建物址 7～9 溝址 8 出土遺物	55
第 8 図	柱列址 1 出土遺物	56

第9図	柱列址2 小柱穴出土遺物	57
第10図	溝址2～5・8出土遺物	58
第11図	土坑34 遺構外出土遺物	59
第12図	遺構外出土遺物	60
第13図	遺構外出土遺物	61
第14図	遺構外出土遺物	62

写真図版目次

図版1	調査区南側全景 調査区北側全景 B・A遺構分布状況	78
図版2	A区(北から) 掘立柱建物址2 同3	79
図版3	掘立柱建物址5・柱列址1 掘立柱建物址5 P2 掘立柱建物址6	80
図版4	掘立柱建物址7 同P1 同P2	81
図版5	掘立柱建物址8 同P4 柱列址1・掘立柱建物址5	82
図版6	柱列址P10 柱列址2	83
図版7	囲溝址4・5 溝址8・土坑31	84
図版8	竪穴4 同遺物出土状態 竪穴5	85
図版9	土坑34・35 A W6P1	86
図版10	重機作業風景 発掘作業風景	87
図版11	発掘作業風景 試掘調査風景 委託測量風景	88
図版12	溝址4・8出土遺物	89
図版13	溝址8 竪穴4出土遺物	90
図版14	竪穴4・7 土坑24・34出土遺物	91
図版15	土坑35・37 遺構外出土遺物	92

表目次

表1	遺構観察表(1)	14
表2	遺構観察表(2)	15
表3	遺構観察表(3)	16
表4	遺構観察表(4)	17
表5	遺構観察表(5)	18
表6	遺構観察表(6)	27
表7	遺構観察表(7)	30
表8	遺構観察表(8)	31

表 9	遺構觀察表(9)	32
表10	遺構觀察表(10)	33
表11	遺物觀察表(1)	63
表12	遺物觀察表(2)	64
表13	遺物觀察表(3)	65
表14	遺物觀察表(4)	66
表15	遺物觀察表(5)	67
表16	遺物觀察表(6)	68
表17	遺物觀察表(7)	69
表18	遺物觀察表(8)	70
表19	遺物觀察表(9)	71
表20	遺物觀察表(10)	72
表21	遺物觀察表(11)	73
表22	遺物觀察表(12)	74
表23	遺物觀察表(13)	75

Ⅰ 経 過

1. 調査に至るまでの経過

昭和63年8月20日付で長野県飯田建設事務所長から、長野県教育委員会教育長ならびに飯田市教育委員会宛に、昭和64年度の県道等の開発に係る埋蔵文化財について回答が提出され（63飯建第540号）、飯田市駄科における県道駄科大瀬木線の道路改良事業の計画が示された。当該地は、埋蔵文化財包蔵地安宅遺跡の一面に位置し、昭和43年12月～44年2月に一般国道151号の付替線建設に先立ち、また、昭和61・63年には民間開発に先立ちそれぞれ緊急発掘調査が実施されている。

平成2年度から事業が実施に移されたのを受けて、平成2年10月19日、飯田建設事務所・長野県教育委員会文化課・飯田市教育委員会の三者が現地にて保護協議を実施した。その結果、用地買収後に試掘調査を実施し、調査結果に基づいて改めて協議することとなった（平成2年11月17日付、2教文第7-200号）。

諸協議に基づいて、平成3年8月29日、飯田建設事務所長 紅粉 彰と飯田市長 田中秀典との間で試掘調査に関する委託契約を締結し、平成4年1月28日、試掘調査に着手した。重機を入れて路線全体にわたってトレンチを設定し、遺構確認面まで掘り下げた。翌29日に器材を搬入し、30日作業員を入れて2月3日まで遺構・遺物の検出作業を実施した。その後、雪・出水により、調査区が水没し、排水しながら写真撮影・測量調査を実施し、2月18日現地作業を終了した。

試掘調査の結果、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が確認されたことから、本発掘調査の実施が不可欠と判断され、平成4年6月11日、飯田建設事務所長 宮島直人と飯田市長 田中秀典との間で発掘調査に関する委託契約を締結した。

2. 調査の経過

諸協議に基づき、平成4年7月6日発掘調査に着手した。重機により表土を除去し、続いて作業員を入れて遺構の検出・掘り下げ作業・精査を行なった。それらについて写真撮影を行ない、空中写真撮影・写真測量調査を（株）ジャステックに委託した。引き続き、排土下の調査を実施するため重機を入れたところ、湿地に重機がはまり込んで作業が中断され、発掘調査は大幅に遅れざるを得なくなった。このため、当初の契約期間内に調査を終了することが困難となり、契約変更を行なった。重機撤去後、残りの調査を同様の手順で順次行ない、平成5年2月15日、現地での作業を終了した。なお、2月24日には、調査地周辺の古環境復元を目的として自然科学的な分析調査を（株）バリノ＝サーヴェイに委託実施するため、試料採取を行なった。現地調査にあっては、調査対象地の北側半分が湿地であったため、重機および作業員による作業とも非常に困難を極めた。

引き続き、平成6年度にかけて、飯田市考古資料館において出土物の水洗・注記・接合・復元作業、現地で記録された図面・写真類の整理作業、遺物の実測・写真撮影作業、遺構図等の作成・トレース作

業、版組み等行ない、本報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 福島 稔 (～平成3年12月) 小林恭之助 (平成3年12月～)
調査担当者	小林正春・馬場保之
調査員	佐々木嘉和・山下誠一・佐合英治・吉川 豊・渋谷恵美子・吉川金利・下平博行 伊藤尚志・福澤好晃
作業員	新井幸子・新井幸子・新井ゆり子・池田幸子・市瀬長年・今村治子・大原久和 岡島 亘・岡田紀子・金井照子・金子正子・金子裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ 川上一子・北原久美子・北原森作・木下喜代恵・木下早苗・木下 傳・木下良子 木下玲子・榑原亜紀子・榑原勝子・小池千津子・小平不二子・小平峯子・小林千枝 五味洋治・斉藤千里・斉藤徳子・坂井勇雄・佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐々木光江 佐藤知代子・塩沢澄子・清水三郎・鈴木尊子・鈴木恵之介・関島真由美・滝上正一 田口久美子・竹本常子・田中 薫・田中恵子・田中百子・田畑恵子・塚原次郎 中島真弓・中平隆雄・西尾茂人・西山あい子・丹羽由美・丹羽啓子・萩原弘枝 林 朝子・林勢紀子・樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢五男・福沢幸子 福沢トシ子・古根素子・古林登志子・細田七郎・森 章・森 信子・牧内郁代 牧内 修・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代・増田香代子・松沢美和子・松下成司 松下真幸・松島直美・松本恭子・松本幸子・三浦厚子・水落佳代子・溝上清見 南井規子・宮内真理子・森藤美知子・矢澤博志・矢沢房子・山田康夫・吉川悦子 吉川紀美子・吉川小夜子・吉川正実・吉沢佐紀子・吉沢まつ美

事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節	(社会教育課長、～平成5年度)
横田 穆	(" 長、平成6年度)
中井洋一	(" 文化係長、～平成3年度)
原田吉樹	(" " 長、平成4・5年度)
小林正春	(" " 、～平成5年度)
	(" " 長、平成6年度)
山下誠一	(" " 、平成6年度)
吉川 豊	(" ")
馬場保之	(" ")

渋谷恵美子（社会教育課 文化係、～平成5年度）
吉川金利 （ “ ” 、平成5・6年度）
下平博行 （ “ ” 、平成5・6年度）
伊藤尚志 （ “ ” 、平成6年度）
福澤好晃 （ “ ” 、平成4年度～）
岡田茂子 （ “ ” 社会教育係、平成5・6年度）
篠田 恵 （ “ ” 、～平成4年度）

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市竜丘地区は、飯田市街地から南に約4～8kmに位置し、飯田市全域から見ればやや南部にあたる。東は天竜川をはさみ龍江地区に、北は毛賀沢川で松尾地区と境を接する。南は久米川をはさみ川路地区となり、西は高位段丘上で伊賀良地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。伊那盆地ができはじめたのは250万年位前からで、天竜川が流れ始めたのもこの頃からといわれる。この頃から60万年前までに南アルプスが隆起をはじめ、竜東側に巨大扇状地ができ、60万年前頃から中央アルプスが隆起をはじめ、伊那谷全体が巨大扇状地で埋め尽くされた。そして、10万年前頃から断層運動が活発となり、中央アルプスの上昇とともに盆地全体も上昇し、断層がたくさんできた。また、山地の上昇と気候の温暖化により、天竜川やその支流により段丘および扇状地の開析が進行した。伊那谷の生い立ちを知る上で、最も参考になるのが松尾から竜丘地区を貫く「念通寺断層」である。

竜丘地区では天竜川が東端を南流し、大部分が鷺流峡の狭窄部にあたり、その先の時又付近からは流れをやや西側に変えて、広々とした氾濫原を形成する。平坦部は、氾濫原を含め大きく5～6の段丘面で形成されており、それらは火山灰が被らない低位段丘Ⅱと、被る低位段丘Ⅰとに大別できる。下位の面が沈降した結果、段丘崖直下には湿地が形成される場合が多い。また、伊賀良と接する中位段丘の標高は500m前後でローム層に覆われた台地で、低位段丘Ⅰとの比高差は約70mを測り、その境が「念通寺断層」である。各段丘面は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流により開析され、複雑な小地形を呈している。

安宅遺跡は、新川に面した中位段丘上のいわゆる「駄科面」に位置しており、年通寺断層に平行する一段下位の小段丘崖下に展開する。断層活動により沈み込んだ遺跡北西側は沈降により湿地化しており、南東側下位のいわゆる「駄科釈面」の段丘縁に近づくほど乾燥している。

気候面でみれば、飯田市は比較的温和であり、平均気温は、13℃を越え、降水量は年間1,600mm程度と年間を通して周辺の山地部より少ない。竜丘地区は飯田市の中でもさらに温暖である。これは、地区の大部分が標高370～440mと低いことが主因であり、また、西側に大きな段丘崖を背負っているため、冬の南西からの卓越風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。こうした温和な気候や起伏に富んだ地形に由来して、飯田市をはじめとして下伊那地域は豊かな動植物相を示している。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の分布の接点にあたり、植物の種類も2,500種に及ぶ植生豊かな地域である。また、飯田市から阿智村・下条村・泰阜村・天竜村に分布するギフチョウは、市内では竜丘・伊賀良・川路・三穂・龍江・千代の各地区に生息しており、平成元年1月31日付で飯田市指定文化財（天然記念物）に指定されたほか、同年4月には地区内桐林を中心とするギフチョウ生息地が環境庁の「ふるさといきものの里」に指定されている。

2. 歴史環境 (挿図1・2)

竜丘地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地であり、殊に、飯田下伊那地方で最も古墳が多く築造されている。竜丘地区での遺跡発掘調査は近年(主に昭和40年代以降)になって増大してきた。これまでに行なわれた発掘調査のうち、一般国道151号付替えに先立つ鏡塚古墳、内山・花の木遺跡、安宅遺跡、県道駄科大瀬木線拡幅改良に先立つ鈴岡城址、農業構造改善事業に先立つ小池遺跡、宮城遺跡、神送塚古墳、前の原遺跡、駄科北平遺跡、市立竜丘保育園建設に先立つ前の原遺跡、治水対策事業運搬道路建設に先立つ蒜田古墳、塚原遺跡、塚原二子塚古墳、ガンドウ洞遺跡、集会所建設に先立つ開善寺境内遺跡、民間開発に先立つ安宅遺跡、上の坊遺跡、蒜田遺跡、ガンドウ洞遺跡、鈴岡城址、西の塚遺跡、久保尻遺跡、前林遺跡、松林遺跡、遠見原遺跡等の緊急発掘調査がある。一方、わずかではあるが宮洞窯址群の学術的な調査や飯田高校考古学班による前の原遺跡調査も行なわれている。

竜丘地区の歴史を概観すれば、縄文時代以降人々の定住した姿が確認されている。しかし、火山灰が確認される低位段丘Ⅰ(いわゆる「桐林面」・「駄科面」・「長野原面」等)や中位段丘上では、市内他地区の上溝遺跡・八幡原遺跡・猿小場遺跡(松尾)や下の原遺跡(伊賀良)等で旧石器時代の遺物が出土しており、地区内にもこの時代の遺跡がある可能性は高い。

縄文時代前期になると、上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、氾濫原から20m程の高所での人々の活動が知られるようになる。中期には宮城遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で堅穴住居址等が調査されており、宮城遺跡では飯田地方では数少ない藤内Ⅱ時期を主とする集落が調査されている。駄科北平遺跡では中期後半の住居址が2軒調査され、さらに終末のものと考えられる石棒を伴う配石墓墳がある。また、開善寺境内遺跡において中期中葉～後葉の遺物が出土している。後期初頭として、宮城遺跡土坑出土の東海地方の影響を受けた土器が目される。後・晩期から弥生時代中期にかけては、具体的に生活の様子を物語る資料はほとんどない。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、他地域の状況と同様、遺跡数が増加しており、これまで中・高位段丘上での調査事例が主である。本遺跡の他、蒜田遺跡・ガンドウ洞遺跡・鈴岡城址で住居址が調査されている。いままでのところ、低位段丘上での調査例はないが、竜東対岸の龍江地区では治水対策事業に先立つ調査で、氾濫原に面した緩斜面で集落の一部が調査されており、今後低位段丘での調査例も増えると考えられる。また、蒜田遺跡・上の坊遺跡では、貼り石をもつ方形周溝墓が調査されている。蒜田遺跡は方墳と考えられる蒜田古墳に、また、上の坊遺跡は長野県史跡馬背塚古墳がそれぞれ近接した位置にあり、古墳時代前～後期の地域的な墓制の特徴を解明する上で、注目される遺跡といえる。

竜丘地区には消滅したものを含めると140基の古墳が築造されており、松尾・座光寺地区とともに古墳が集中する地域である。特に、前方後円墳および帆立貝型古墳の数が多く際立っており、塚越・権現堂・兼清塚・丸山・大塚・塚原二子塚・金山二子塚・馬背塚・御猿堂の前方後円墳、および塚原3号・鏡塚・鎧塚の帆立貝型古墳がある。かつて飯田下伊那地方の古墳は横穴式石室を代表として語られることが多かったが、近年では5世紀代の古墳築造開始期のあり方に注目が集まりつつある。権現堂・兼清塚・丸山・大塚・塚原二子塚・塚原3号・鏡塚・鎧塚各古墳は、横穴式石室に先行して堅穴式石室



1. 安宅遺跡 2. 駄科北平遺跡 3. 遠見原遺跡 4. 松ヶ崎遺跡 5. 前林遺跡・前林遺寺
6. 内山・花の木遺跡 7. 久保尻遺跡 8. 前原遺跡 9. 宮城遺跡 10. ガンドウ洞遺跡
11. 森田遺跡 12. 圓善寺境内遺跡 13. 森田古墳 14. 塚原古墳群 15. 鈴岡城址
16. 松尾城址 17. 宮洞原址群 18. 河内ヶ原原址群 19. 埴原瓦窯址

挿図1 調査遺跡および主要遺跡位置図

やそれに類する埋葬施設を持つ5世紀から6世紀初頭の古墳と考えられている。そして、当地方の5および6世紀の古墳築造の動向は、畿内における大和政権の大古墳築造の動きと通じることが指摘されており、古墳出土の馬具や殉葬馬と絡めて、本地区が馬匹生産で重要な役割を果たしたといわれている。

古墳時代後期の集落址は、本遺跡や前の原遺跡・ガンドウ洞遺跡等わずかな調査例のみであるが、前述の古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。前の原遺跡では、一辺が11mを測る大規模な竪穴住居址が調査されており、出土遺物から居住のための施設と考えられるが、居住者の他と懸隔した性格を物語るものと考えられる。

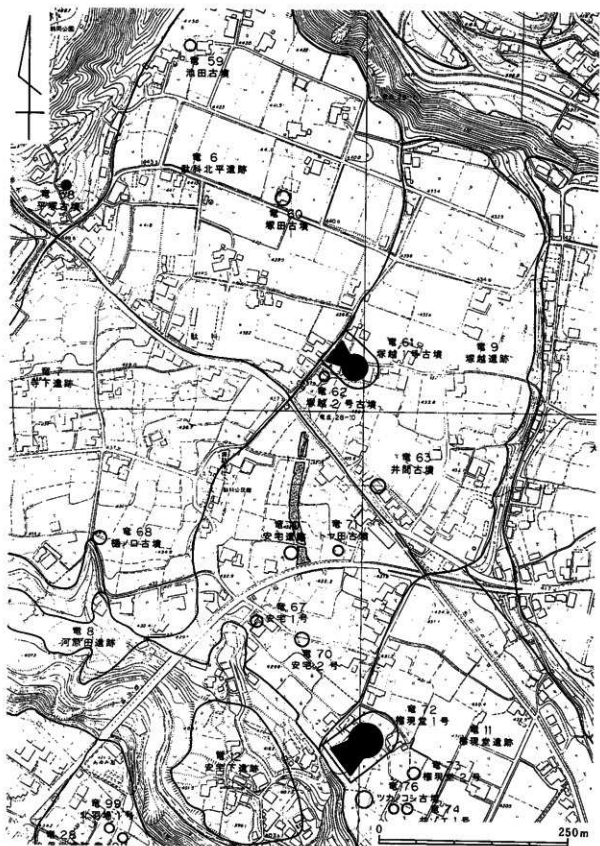
続く、白鳳期には上川路廃寺の存在が、古瓦出土から推測されている。また、奈良時代から平安時代にかけて桐林に古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺、さらに上川路上の坊遺跡で古瓦、桐林宮洞窯址からは埴仏が出土している。古墳築造に引き続いて新たな権力の象徴として寺院の建立がなされ、本地区が重要な位置を占め続けていたことが伺われる。

本遺跡や前の原遺跡では、これまでに奈良・平安時代の集落址の一面が調査されている。前の原遺跡の場合、時期および性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面に庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。古墳時代以降、竜丘地区が当地域の主要な位置を占めていたことをさらに裏付けるものといえる。また、高位段丘の縁の駒沢川に面した部分では、良質な粘土と湧水に恵まれ、陽当たりの良い緩斜面を利用して宮洞・河内ヶ洞といった須恵器生産の窯址群や埴洞瓦窯址が集中している。

古代東山道の経路についてはいくつかの推定路線が、それぞれの研究者により示されている。座光寺地区の恒川遺跡が伊那郡衙址であり、また、松尾地区の久井遺跡は大規模掘立柱建物址が調査され、古代官衙関連の遺跡と推測される。また、本遺跡も本書の内容のとおり、今次調査では規則的に配列された掘立柱建物址・柱列址があり、かつ灰釉陶器碗の転用硯が出土しているなど、一般集落とは考え難いものである。また、今次調査地点北側500mでは、平成元年度に実施した詳細分布調査に際して、平安時代の円面硯が採表されている。このように、古墳時代の主要古墳の分布状況と、前述の律令寺院址及び官衙的遺跡の分布状況を勘案すれば、竜丘・松尾・座光寺を東山道が通過したとする説が最有力といえる。

平安時代の末期には、文書に伊賀良庄の名が登場し、地区内の一部が伊賀良庄に含まれている。鎌倉時代末には鎌倉・京都で禪宗が流行したことを受けて、地区内に名刹開善寺が開かれ、寺伝によれば建武2(1335)年領主小笠原貞宗が京都建仁寺より清拙正澄を招請して創建されたとも、また、貞和2(1346)年7月19日の三浦和田文書によれば、地頭江馬氏が寺領として中村・河路両郷を寄進し、大鑑清拙を開山として禪刹開善寺を創建したともいわれる。同寺所蔵の重要文化財「絹本着色八相涅槃図」は時の五山文化そのものを直に受け入れたことを物語っている。暦応元(1338)年室町幕府から諸山に、応永34(1427)年十刹に列せられたが、明応8(1499)年に火災に遭い山門を除いて焼失し、衰微した。その後、天文18(1549)年、小笠原信貴が武田信玄の援助を受けて京都妙心寺より速伝を招き復興したが、天正10(1582)年織田信長の信濃侵攻に際し兵火を受け、元禄11(1668)年頃にはほぼ現在の寺観に復している。山門は重要文化財、鐘楼は重要美術品となっている。

地区の北端には、南北朝期に小笠原貞宗の次子宗政により、毛賀沢川に面して鈴岡城が築城され、対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であった。しかし、信濃国守護職を松尾小笠原と争い急速に勢力

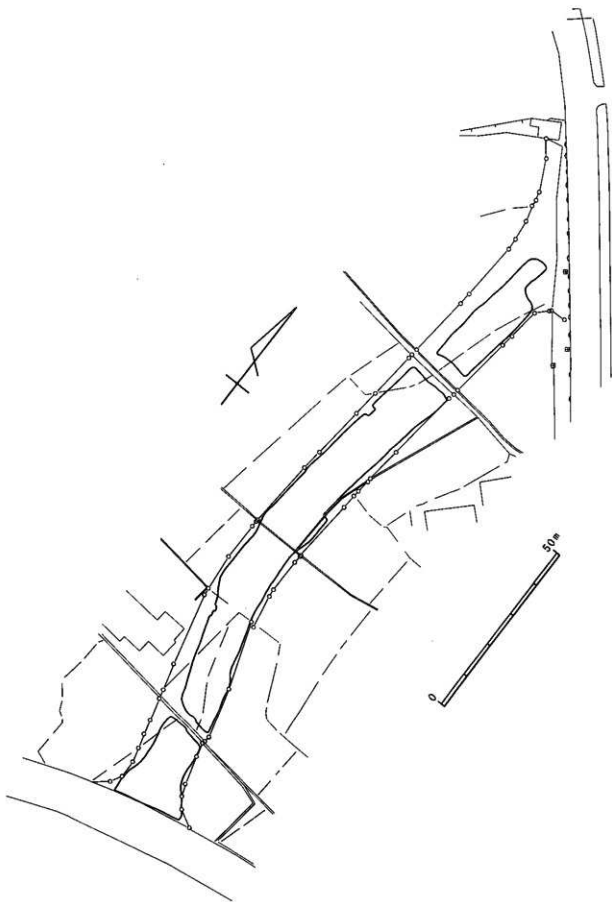


挿図2 調査位置および周辺遺跡位置図

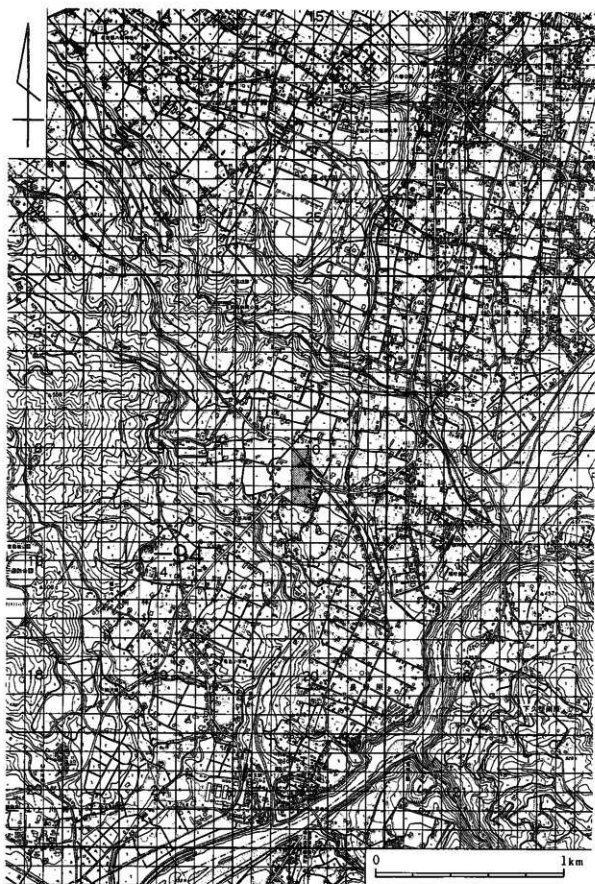
が衰え、天正10(1582)年織田信長の信濃侵攻により滅亡した。駄科北平遺跡では中世堂址と考えられる遺構や四耳壺・青磁・山茶碗・内耳土器・和鏡等遺物が調査されており、鈴岡小笠原氏と深い関わりがあると考えられる。

地区内時又地籍は、天龍川が深く緩やかに濺んでおり、時又港は江戸時代初期より飯田藩の江戸御廻米の舟出港として栄えており、その他煙草・柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出された。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修がすすんで運送馬車が登場して通船は縮小され、竜東や南部山間地への物資の運搬等を中心に繁盛したが、明治40年代以降、橋梁が次々に掛けられたり鉄道が延長されたりして、徐々に衰退していった。

竜丘地区は、古代から近代にいたるまでの飯田下伊那地方の中心地のひとつに上げられよう。



挿図3 路線図および調査位置図



挿図4 基準メッシュ区画調査位置図

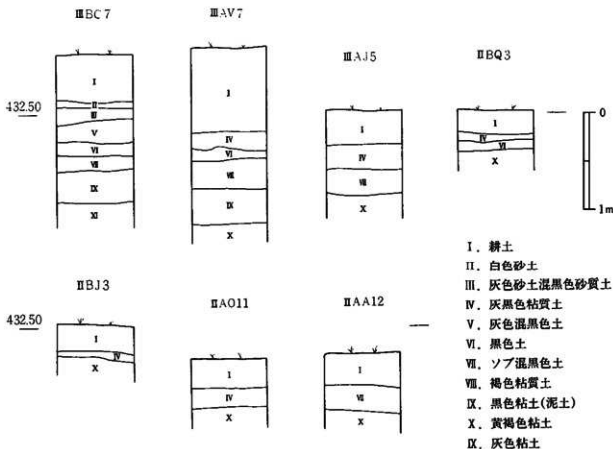
III 調査結果

1. 調査区の設定 (挿図3・4)

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した(設定方法については、飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』参照)。今次調査地点は、LC-94 10-44・同10-36・同10-28内に位置する。調査においては、LC-94 10-44をI区、同10-36をII区、同10-28をIII区とした。

2. 基本層序 (挿図5)

試掘調査時に把握された基本層序は、挿図5のとおりである。層序は、バリノ・サーヴェイ株式会社の分析報告中の層序と表記は異なるものの、対応する。IX・VIII・V層はIII区以北に、また、VI層はII区北半以北に分布する。IV～VI層は、性状が同じであると判断された。特に、IV・V層は一気に埋まった



挿図5 基本層序

考えられる。調査区北半を中心に各層からの遺物出土があるが、VI・VII層では奈良～平安時代の遺物が混じって一次的な包含状態になく、層の時代性については、不明である。

検出遺構についてみると、調査区北半では、竪穴7・土坑34がIX層上面から掘り込まれている。これ以外の大部分の遺構は、VIII層上面から掘り込まれており、遺構検出面はVIII層上面である。南半ではVIIないしX層上面から遺構が掘り込まれている。VII層の分布は部分的であり、遺構検出面はX層上面である。掘立柱建物址5・8・9で柱痕が、掘立柱建物址7で礎板が遺存しており、建物構築後に一帯が湿地化したと考えられる。なお、掘立柱建物址7の礎板については、他の掘立柱建物址より時期が下り湿地化に対応したのではなく、溝址4と重複した結果、採用された措置と考えられる。

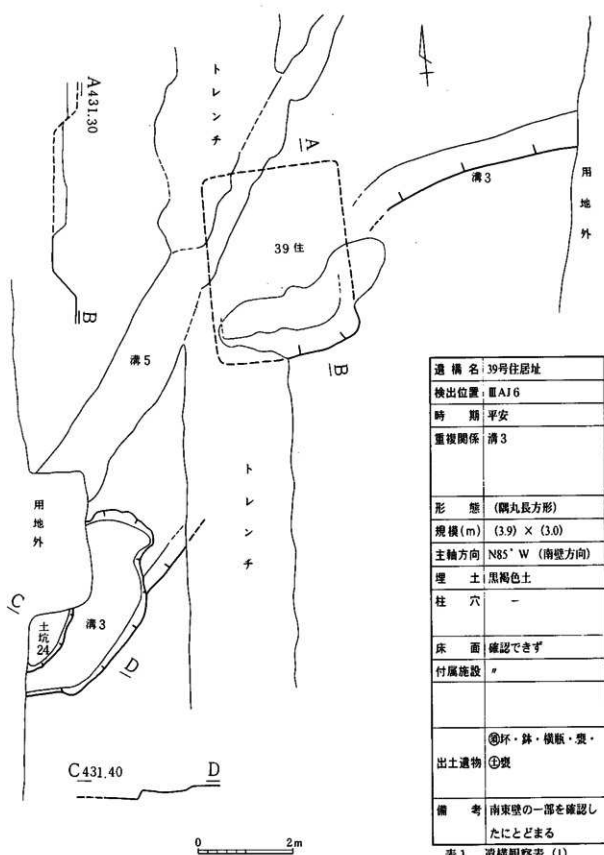
自然化学的な分析調査の結果では、IX層下部は陸生珪藻の出現率や形状から、乾いた場所の土壌が再堆積した可能性が指摘されている。また、III層は周辺に沼沢地のような水域環境が存在し、水性堆積であったと推定されている。さらに、植物珪酸体分析等からIX層以上が水田層に相当する可能性があること、III層では稲作の様態が変化した可能性が指摘されている。なお、発掘調査時、ⅢAU5調査区壁際のセクションにおいて、VIII層上面に畦畔らしい高まりが確認された。しかし、面的な確認には至らなかった。

3. 遺構と遺物

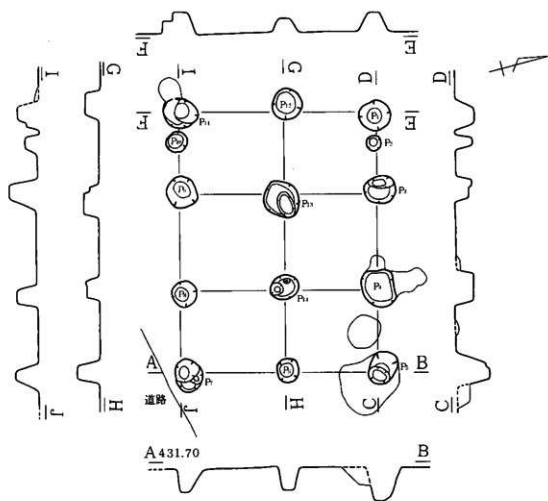
調査された遺構の概要は、以下のとおりである（付図1）。

竪穴住居址	1軒
掘立柱建物址	8棟
柱列址	2
囲溝址	3
溝址	11条
溝状址	2条
竪穴	4基
土坑	29基
小柱穴	多数

また、特記される遺構外遺物として、図示不能な火舎破片がある。



挿図6 39号住居址、溝3、土坑24



挿図7 竪立柱建物址 2

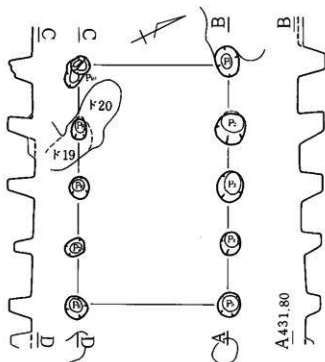
0 2m

遺構名	竪立柱建物址 2
検出位置	IBY12
時期	-
重複関係	-
規模(m)	5.36×4.16
心寸	桁1.68+2.0+1.68× 梁2.2+1.96
主軸方向	N76° E
埋土	暗灰砂土
出土遺物	P6㊦燹
備考	

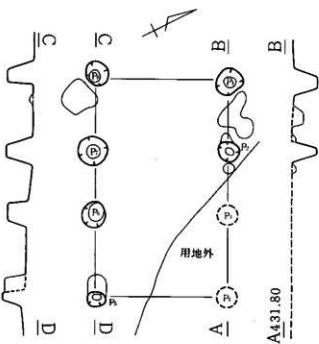
表2 遺構観察表(2)

遺構名	竪立柱建物址 3
検出位置	IIAQ9
時期	-
重複関係	土20
規模(m)	4.96×3.2
心寸	桁1.24×4 ×梁3.2
主軸方向	N62° E
埋土	黒色土
出土遺物	P1㊦燹 P2㊦燹 P9㊦燹
備考	

遺構名	竪立柱建物址 4
検出位置	IIAS9
時期	-
重複関係	-
規模(m)	4.56×2.8
心寸	桁1.76+1.28+1.52 ×梁2.8
主軸方向	N62° E
埋土	黒色土
出土遺物	-
備考	



獨立柱建物址 3



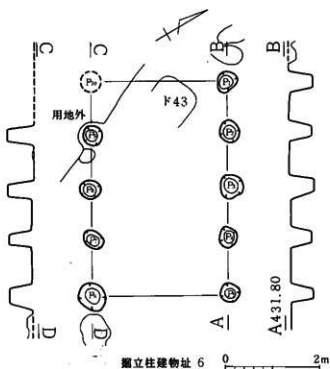
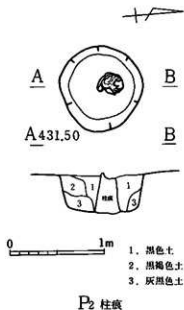
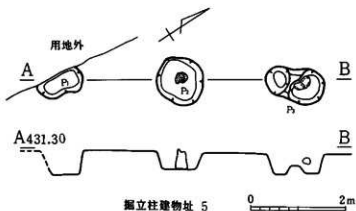
獨立柱建物址 4

挿図8 獨立柱建物址 3・4

遺構名	獨立柱建物址 5
検出位置	ⅡAN4
時期	奈良
重複関係	-
規模(m)	-×4.8
心心	桁 -×梁2.4
主軸方向	(N60°E)
埋土	黒色土
出土遺物	P1⑥・蓋
備考	P2柱痕あり

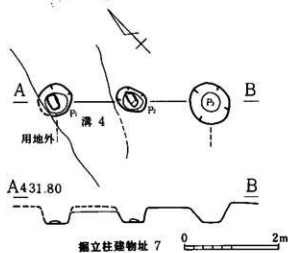
遺構名	獨立柱建物址 6
検出位置	ⅡAO8
時期	-
重複関係	土43
規模(m)	4.48×2.88
心心	桁1.12×4 ×梁2.88
主軸方向	N61°E
埋土	黒色土
出土遺物	P8④・蓋
備考	

表3 遺構観察表(3)

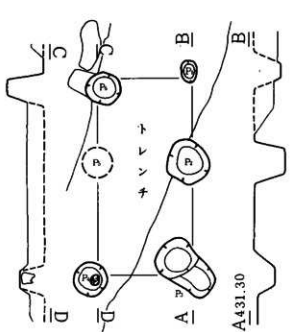


遺構名	獨立柱建物址 7
検出位置	Ⅱ BN I
時期	奈良
重複関係	溝4を切る
規模(m)	- × (3.36)
心寸	桁 - × 梁1.68
主軸方向	N49° E
埋土	黒色土
出土遺物	P1 ④ 環・環
備考	P1・P2に礎板あり

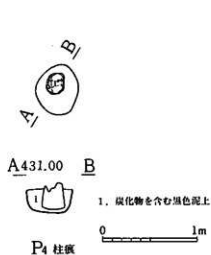
表4 遺構観察表 (4)



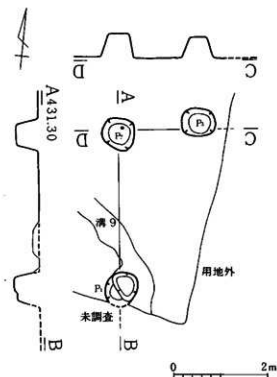
挿図9 獨立柱建物址 5~7



掘立柱建物址 8



P4 柱痕

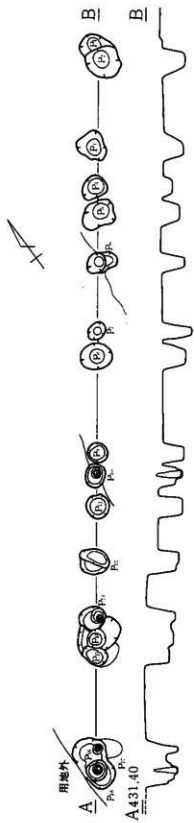


掘立柱建物址 9

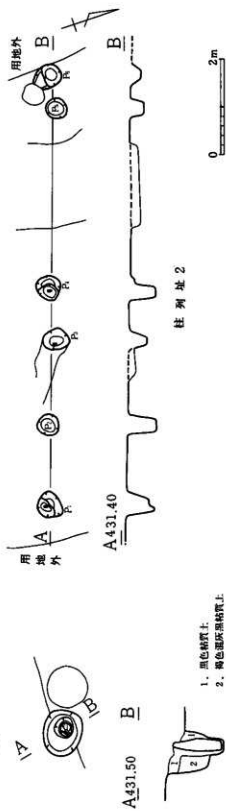
遺構名	掘立柱建物址 8
検出位置	ⅢBE8
時期	-
重複関係	溝10・12
規模(m)	4.08×2.0
心心	桁1.8+2.28 ×梁2.0
主軸方向	N11°E
埋土	黒色泥土
出土遺物	P1④炭
備考	P4に柱痕あり
遺構名	掘立柱建物址 9
検出位置	ⅢAU9
時期	-
重複関係	溝9
規模(m)	-×-
心心	桁3.3×梁1.7
主軸方向	N7°E
埋土	黒色泥土
出土遺物	-
備考	P2に柱痕あり

表5 遺構観察表(5)

挿図10 掘立柱建物址 8・9



柱列址 1



1. 黑色標實上
2. 黃色標實上

柱列址 1 P10柱底



插图 11 柱列址 1 · 2

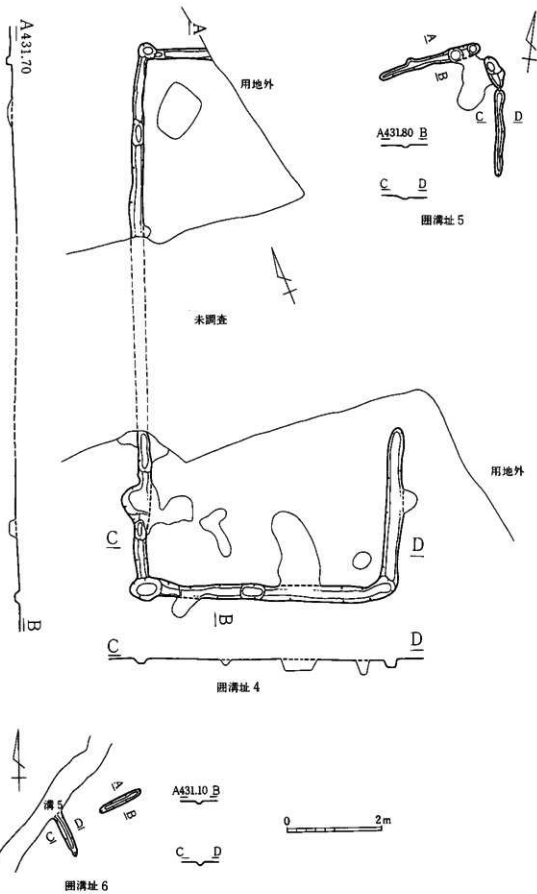


插图12 图溝址4~6

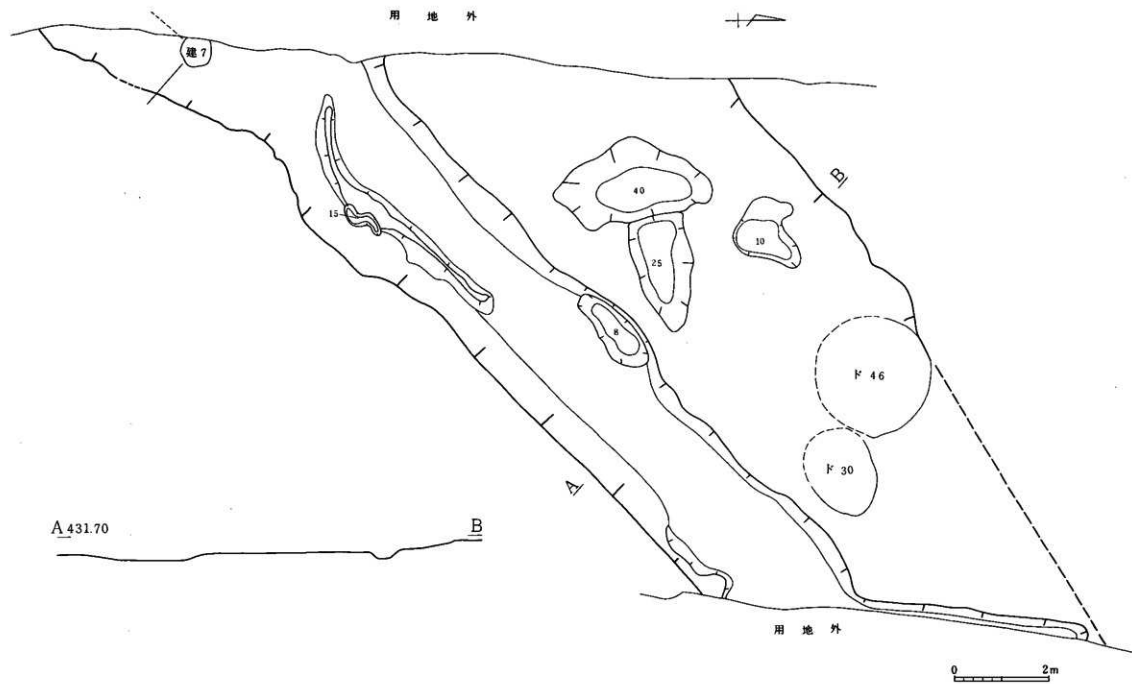
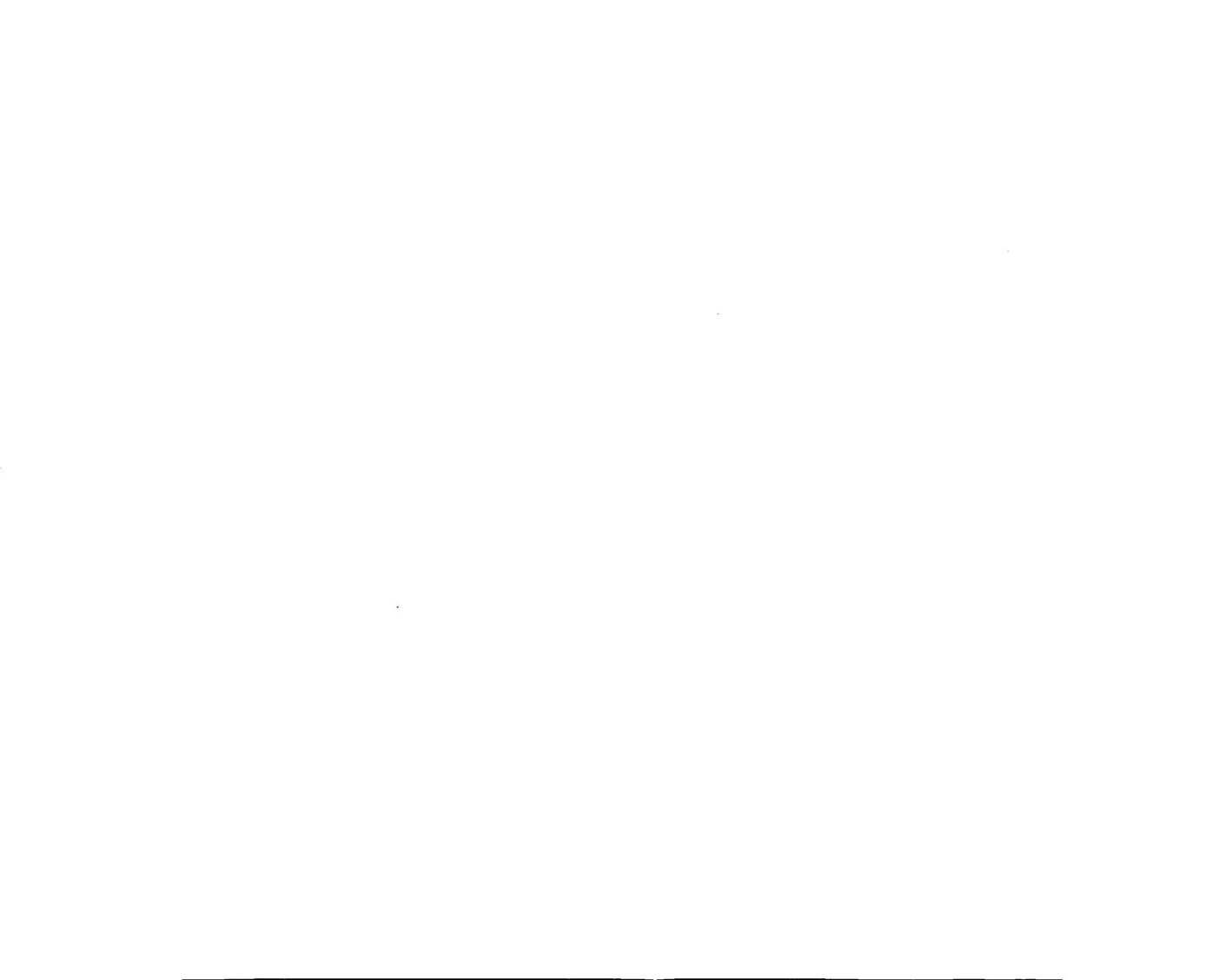
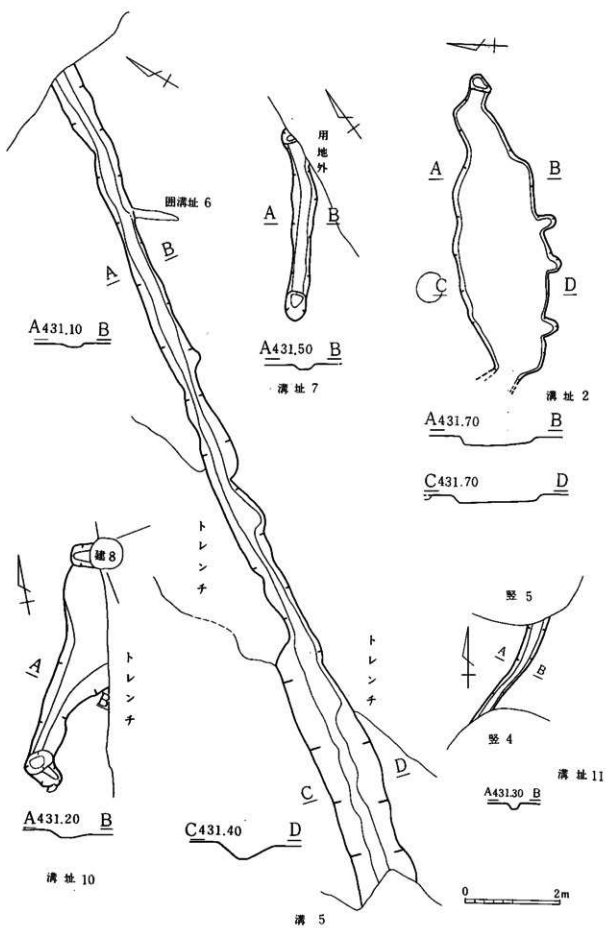
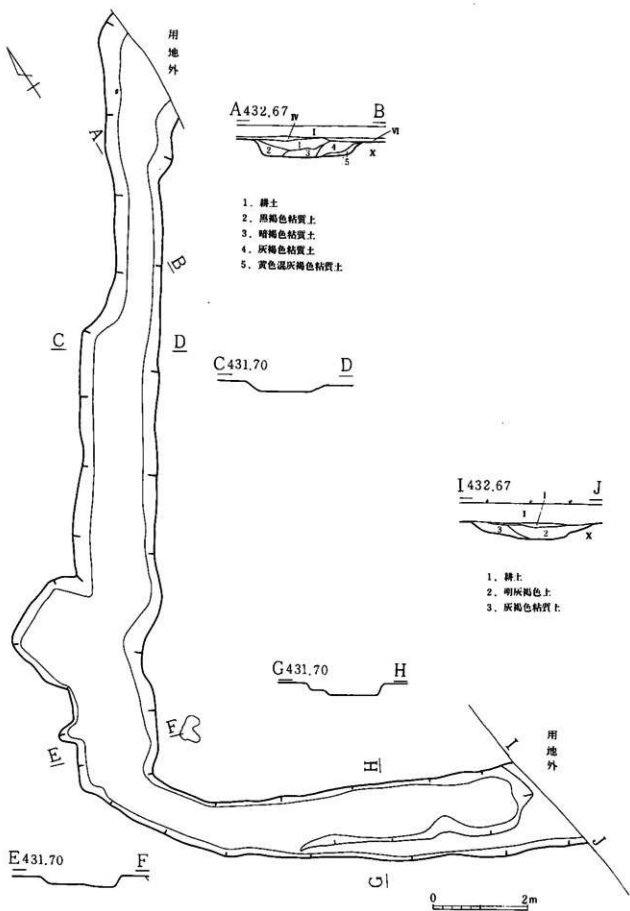


插图13 遗址4

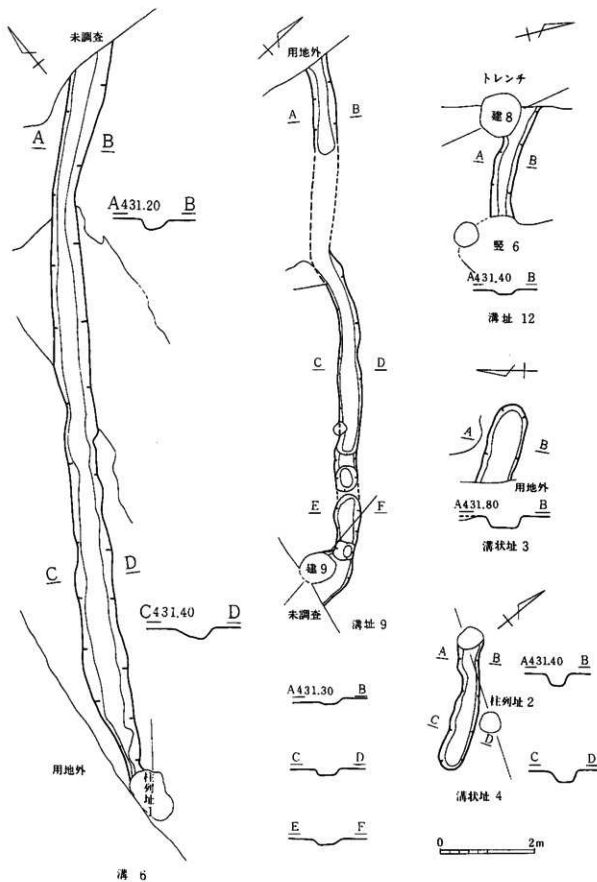




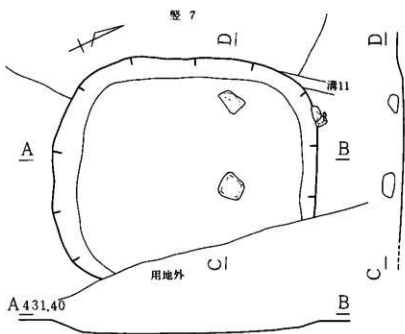
挿図14 溝址 2・5・7・10・11



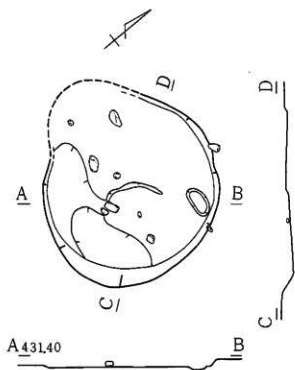
挿図15 溝址8



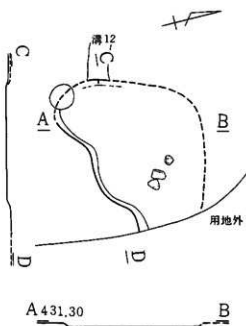
挿図16 溝址 6・9・12、溝状址 3・4



竪穴 4



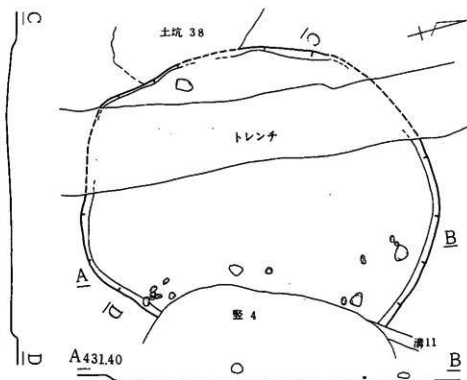
竪穴 5



竪穴 6



挿図17 竪穴 4~6



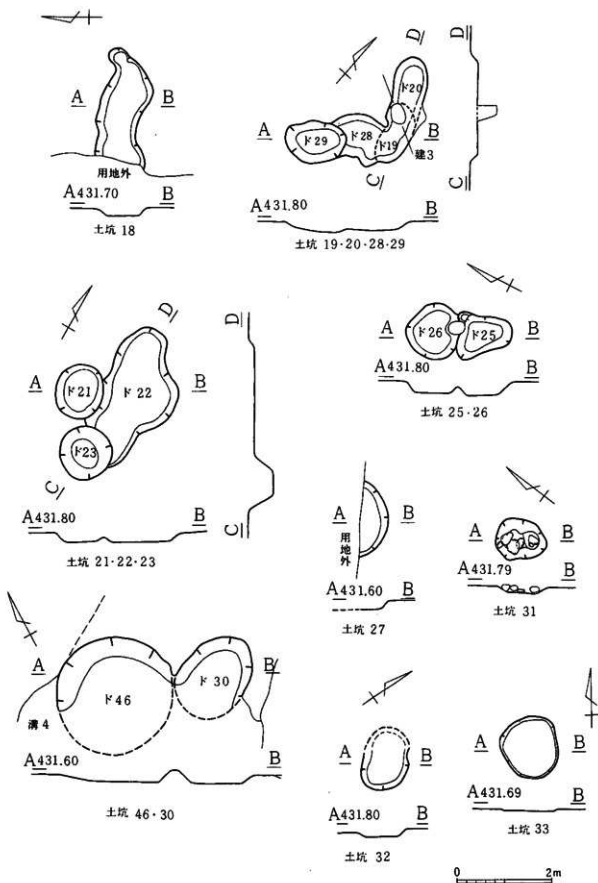
竪穴 7

0 2m

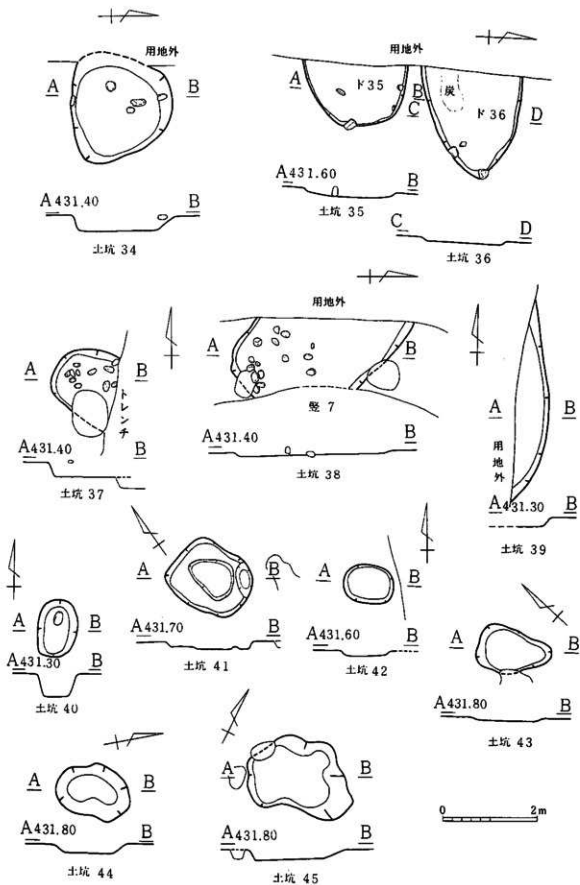
挿図18 竪穴 7

遺構名	回版No	検出位置	規模 (cm)	形態	主軸	覆土	時代	重複遺構	出土遺物
柱列址 1	挿図11	ⅢAM6	古柱間 300	延長16m	N37° W	黒色粘質土	-	古 P2 P5 P8 P11 P14 P18	
			中柱間 300					中 P1 P4 P7 P10 P13 P16	
			新柱間 210					新 P3 P6 P8 P9 P12 P15 P17	
柱列址 2	挿図11	ⅢAW9	長 -	-	N70° E	暗褐色土	奈良	溝状4	P1①環 P3②環③環
			短 -					土35	鉢 P4④環⑤環 P5
			深 -						⑥環・P6⑦環
圓溝址 4	挿図12	ⅡAG12	1,140 (10.8)	矩形	N22° W	黒色土 暗褐色土	-	-	-
			550 (5.0)						
			20						
圓溝址 5	挿図12	ⅡAN9	-	-	-	黒色土	-	-	-
			-						
			10						

表6 遺構観察表 (6)



擇圖19 土坑18~23·25~33·46



挿図20 土坑34~45

遺構名	図版No	検出位置	規模 (cm)	形態	主軸	覆土	時代	重複遺構	出土遺物
團清址 6	挿図12	Ⅲ A N 8	長 短 深 — — 10		—	黒色土	—	清3	—
清址 2	挿図14	Ⅱ A B 10	640 40~190 10~20	不整形	N80° E	灰色砂混 黒色土	—	—	㊦甕
清址 3	挿図6	Ⅲ A K 7	— — —			黒色土	奈良 土24 39住 團清6		㊦环・甕 ㊦甕・蓋 环・盤・鉢・皿、鉄 滓
清址 4	挿図13	Ⅱ B T 4	1,580 670~920 4~30		N49° E	断面図参 照 黒色砂質 土 砂土互層	奈良 建7 土30・46		㊦环 ㊦甕・蓋・环 鉢・横瓶・埴瓶・盤 高坏・長頸瓶・短頸 瓶、鉄滓
清址 5	挿図14	Ⅲ A I 4	1,800 30~120 5~50		N37° E	黒色土	—	—	㊦甕
清址 6	挿図16	Ⅲ A K 4	1,520 20~100 5~30		N33° E N50° E	黒色土 下部灰黒 色土	奈良	—	㊦环
清址 7	挿図14	Ⅲ A G 8	360 30~50 10~20		N39° E	黒色土	—	—	—
清址 8	挿図15	Ⅱ B K 3	2,460 100~270 10~40	鈎手	N36° E N119° E	黒色土	奈良		㊦甕・甕 ㊦甕・蓋 环・鉢・高坏・盤・ 横瓶、器台
清址 9	挿図16	Ⅲ A U 7	1,150 40~60 5~40		N42° W N48° W	黒色泥土	奈良 建9		㊦甕 ㊦甕・蓋・环 鉢
清址 10	挿図14	Ⅲ B D 6	400 50~80 10~20	不整形	N35° E	灰色粘土 混 黒色粘土	—	建8	—
清址 11	挿図14	Ⅲ B B 9	220 20~40 10~20		N19° E N37° E N140° W	黒色泥土	—	—	—

表7 遺構観察表 (7)

遺構名	回廊No	檢出位置	規模 (cm)	形態	主軸	覆土	時代	重複遺構	出土遺物
溝址 12	神園16	ⅢBE9	長 240 短 50 深 10	-	N53° W N110° E	-	-	建8 整6	-
溝状址 3	神園16	ⅡAC9	170 70 30	-	N105° W	砂質混暗 褐色	-	-	-
溝状址 4	神園16	ⅢAW8	260 50 30	-	N42° E	灰黑粘土	-	-	-
竪穴 4	神園17	ⅢAY9	560 390 30	不整方形	-	漆黑土	平安	竪7 溝11	㊦甕・坏・皿 ㊧甕 蓋・坏・鉢・壺㊨碗 皿・段皿・長頸瓶
竪穴 5	神園17	ⅢBC9	430 390 20	不整形	-	炭含黑色 土	-	-	-
竪穴 6	神園17	ⅢBE10	320 300 10	不整形	-	炭混灰黑 粘土	-	溝12	-
竪穴 7	神園18	ⅢAY7	730 500 20	不整楕圓 形	-	灰黑粘土	奈良	竪4 溝11 土36・38	㊦甕 ㊧甕・蓋・坏 鉢・轆羽口
土坑 18	神園19	ⅠBX9	240 100 20	不整形	-	褐色土	-	-	-
土坑 19	神園19	ⅡAP8	130 60 20	不整形	-	黑色土	-	建3	-
土坑 20	神園19	ⅡAQ8	100 70 20	不整形	-	褐色土混 黑色土	-	建3 土19	㊦甕
土坑 21	神園19	ⅡAU7	110 100 20	不整門形	-	暗褐色土	-	土22	-
土坑 22	神園19	ⅡAV8	240 160 20	不整形	-	黑色土混 褐色土	-	土21・23	-

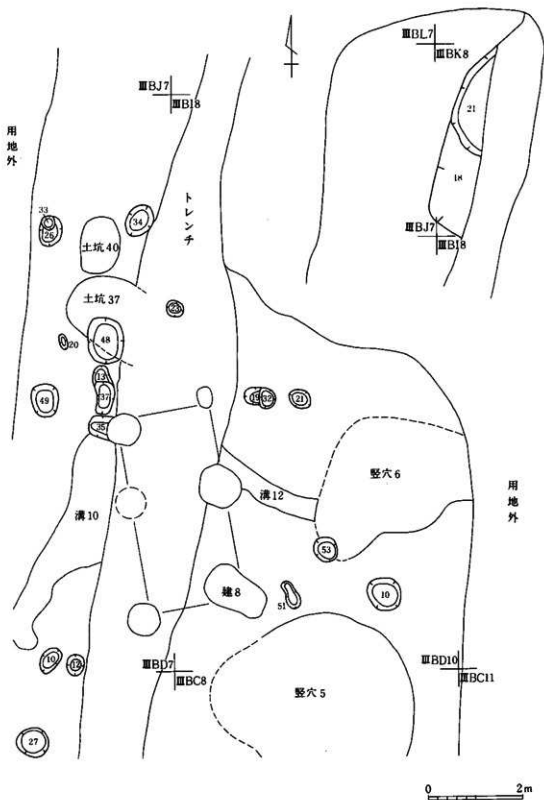
表8 遺構觀察表(8)

遺構名	図版No	検出位置	規模 (cm)	形態	主軸	覆土	時代	重複遺構	出土遺物
土坑 23	挿図19	ⅡAU8	長 110 短 110 深 50	不整形	-	暗褐色土	-	土22	-
土坑 24	挿図6	ⅢAF3	80 30	-	-	黒色土	奈良	溝3	㊦蓋・坏
土坑 25	挿図19	ⅡAE9	110 70 30	不整形	-	暗褐色土	-	土26	-
土坑 26	挿図19	ⅡAE9	110 110 20	不整形	-	褐色土混 暗褐色土	-	土25	-
土坑 27	挿図19	ⅢAC2	60 20	-	-	黒色土	-	-	㊦甕 ㊦甕
土坑 28	挿図19	ⅡAP8	60 90 20	不整形	-	褐色土	-	土19・29	㊦甕
土坑 29	挿図19	ⅡAP7	130 90 20	不整形 楕円形	-	黒色土	-	土28	-
土坑 30	挿図19	ⅡBU5	190 140 30	不整形 楕円形	-	-	奈良	溝4	㊦甕 ㊦甕・坏
土坑 31	挿図19	ⅡBO4	100 80 20	不整形 楕円形	-	灰色砂土	奈良	-	㊦甕 ㊦坏
土坑 32	挿図19	ⅡBQ5	130 90 20	不整形 楕円形	-	黒色土	-	-	-
土坑 33	挿図19	ⅡBR6	120 130 10	不整形 楕円形	-	暗褐色土	-	-	-
土坑 34	挿図20	ⅢAT5	230 210 20	不整形	-	暗褐色混 黒褐色土	奈良 ~平安	-	㊦甕・坏 ㊦甕・蓋 坏・鉢・火鉢 ㊦輪 段皿・蓋

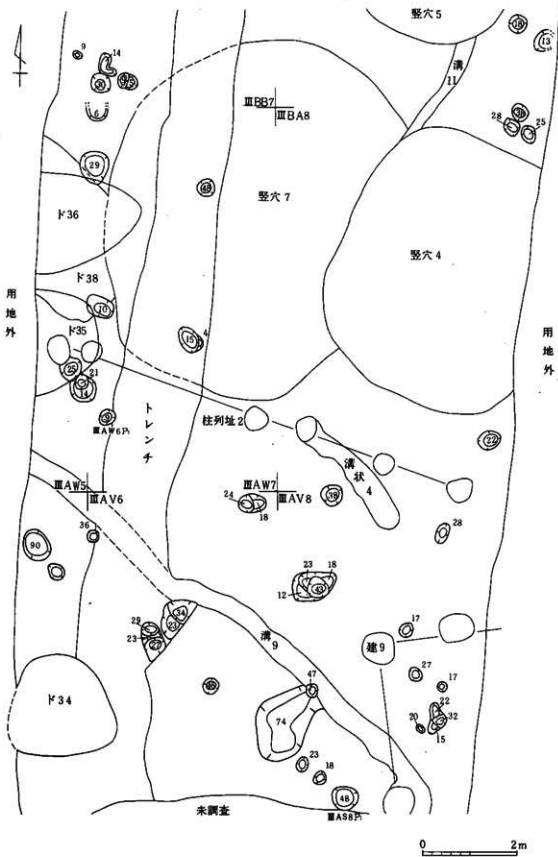
表9 遺構観察表 (9)

遺構名	図版No	検出位置	規模 (cm)	形態	主軸	覆土	時代	重複遺構	出土遺物
土坑 35	挿図20	ⅢAX 5	長 120	不整形	-	暗褐色土 黒褐色土	平安	-	①甕・碗 ②甕・蓋 環・長頸瓶・横瓶
			短 220						
			深 20						
土坑 36	挿図20	ⅢAY 5	220	不整形	-	-	奈良 ~平安	-	①甕 ②甕・蓋・環 鉢
			200						
			10						
土坑 37	挿図20	ⅢBG 7	140	不整形	-	灰黒粘土	平安	-	①甕・碗・環 ②甕 蓋・環③碗
			130						
			30						
土坑 38	挿図20	ⅢAY 5	340	不整形	-	黒褐色土	奈良	-	①甕・環・高環 ② 甕・蓋・環・壺・長 頸瓶
			140						
			10						
土坑 39	挿図20	ⅢBD 6	420	不整形	-	黒色粘土	奈良	-	①甕②甕・蓋・環
			70						
			20						
土坑 40	挿図20	ⅢBH 7	120	不整形円	-	黒色粘土 混 灰色粘土	-	-	-
			80						
			40~50						
土坑 41	挿図20	ⅡAA12	170	不整形	-	灰黒色土	-	-	-
			140						
			10~20						
土坑 42	挿図20	ⅡAG13	100	不整形円	-	黒色土混 褐色土	-	-	-
			80						
			10						
土坑 43	挿図20	ⅡAO 7	150	不整形	-	黒色土	-	建6	-
			90						
			10						
土坑 44	挿図20	ⅡAV 4	160	不整形	-	暗褐色土	-	-	-
			110						
			20						
土坑 45	挿図20	ⅡBD 6	200	不整形	-	褐色土	-	-	-
			140						
			20						
土坑 46	挿図19	ⅡBV 4	250	円形	-	-	-	溝4	-
			240						
			30						

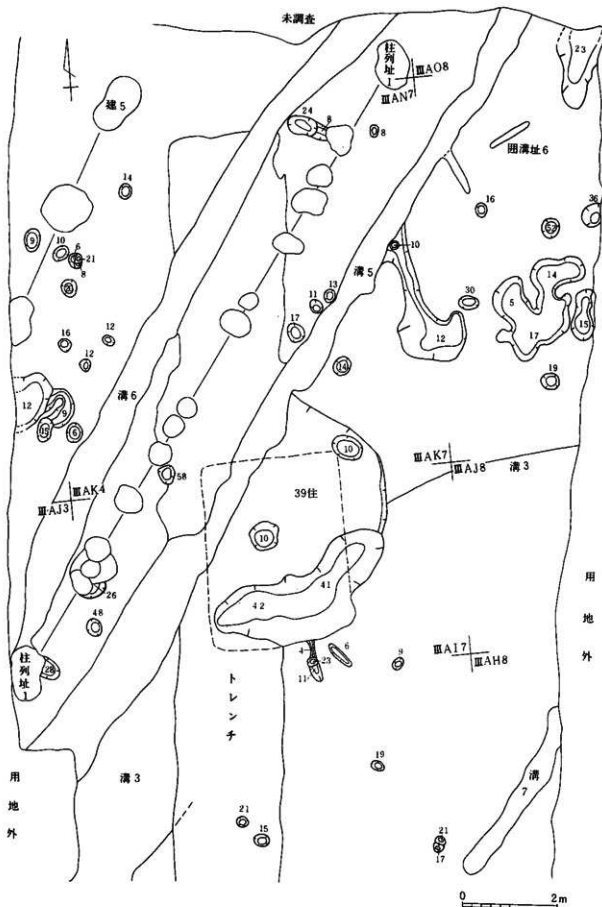
表10 遺構観察表 (10)



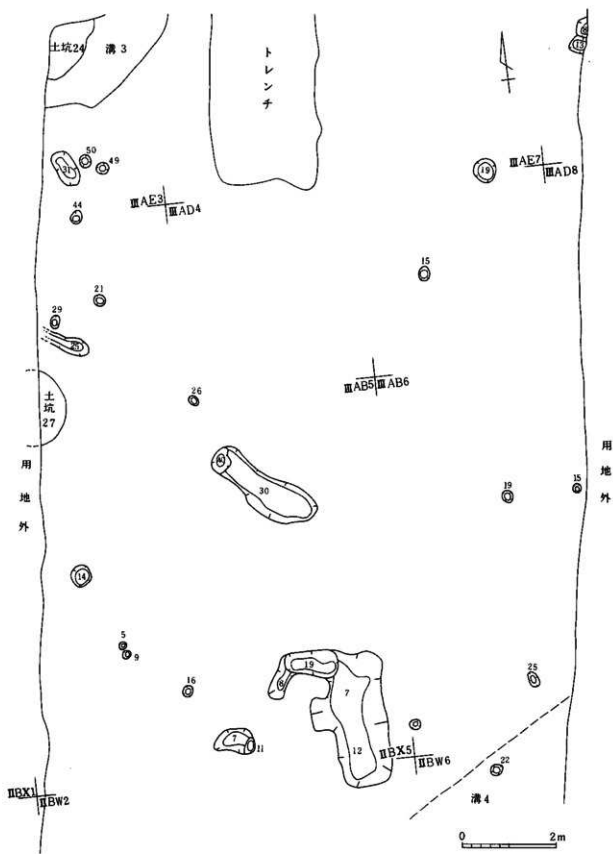
挿図21 周辺柱穴平面図(1)



挿図22 周辺柱穴平面図(2)



挿図23 周辺柱穴平面図(3)



挿図24 周辺柱穴平面図(4)

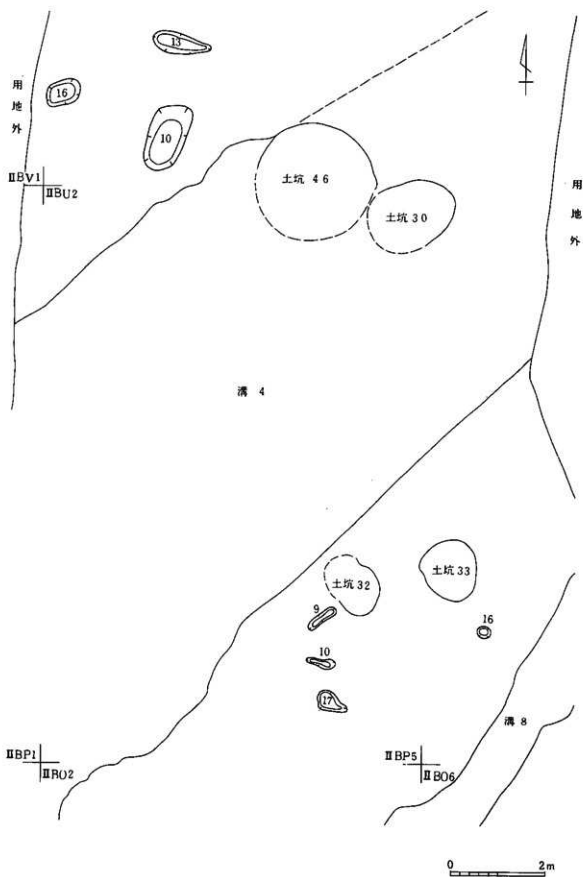


插图25. 周边柱穴平面图(5)

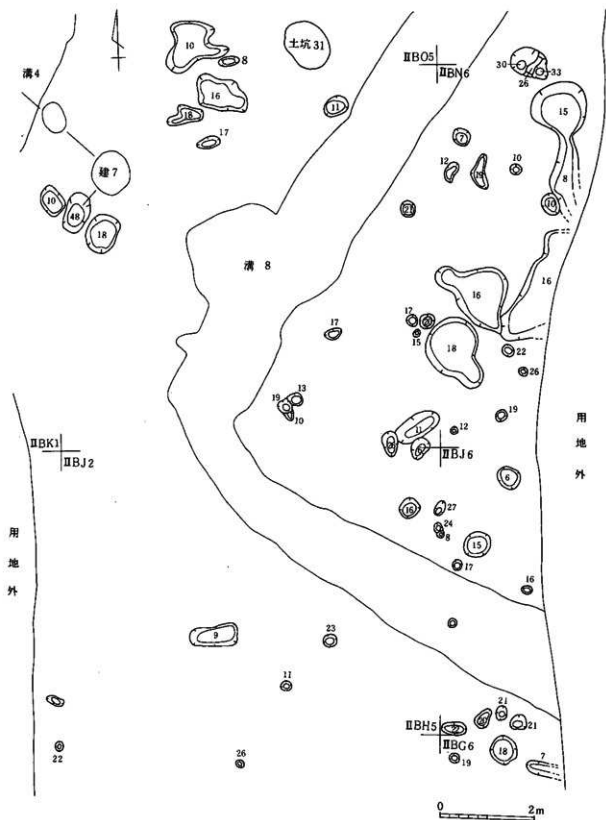


插图26 周原柱穴平面图(6)

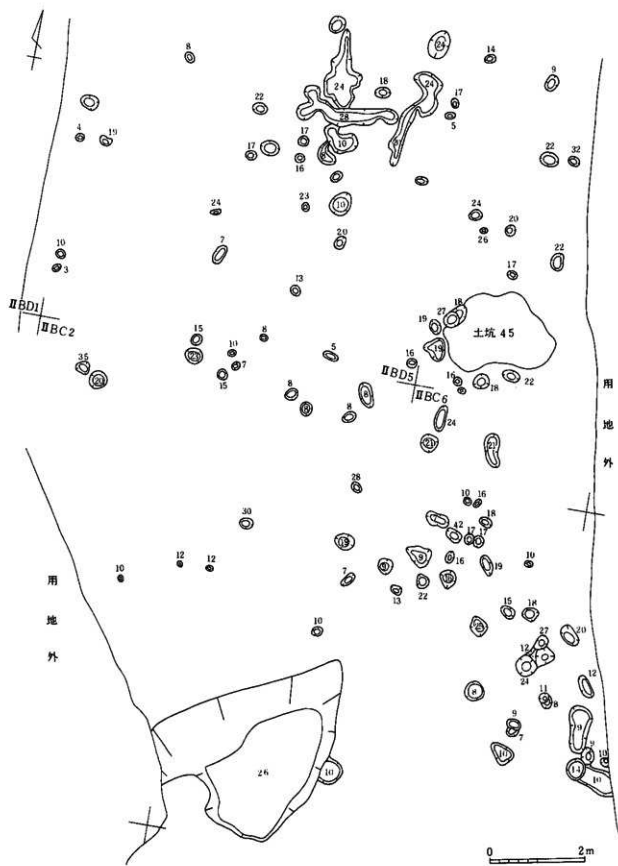


插图27. 周边柱穴平面图(7)

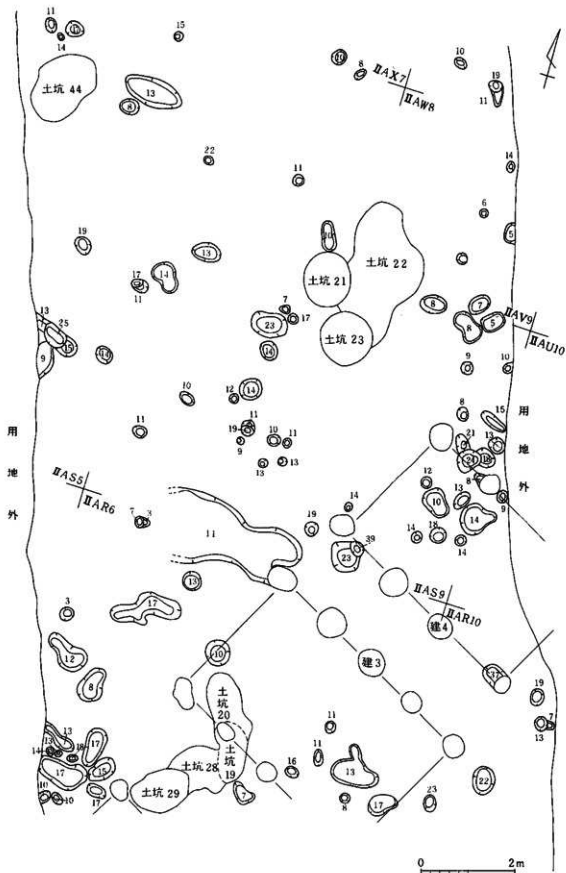


插图28 周边柱穴平面图(8)

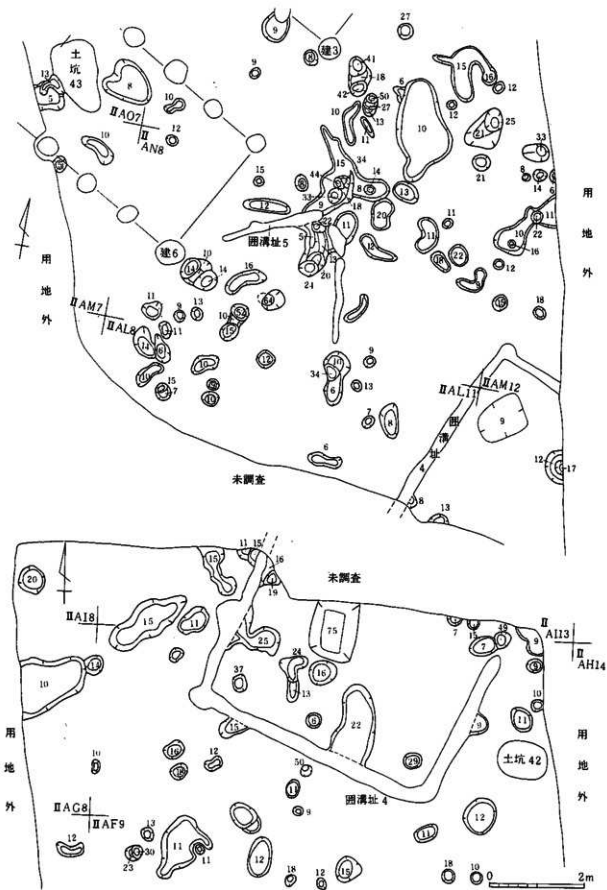


插图29 周边柱穴平面图(9)

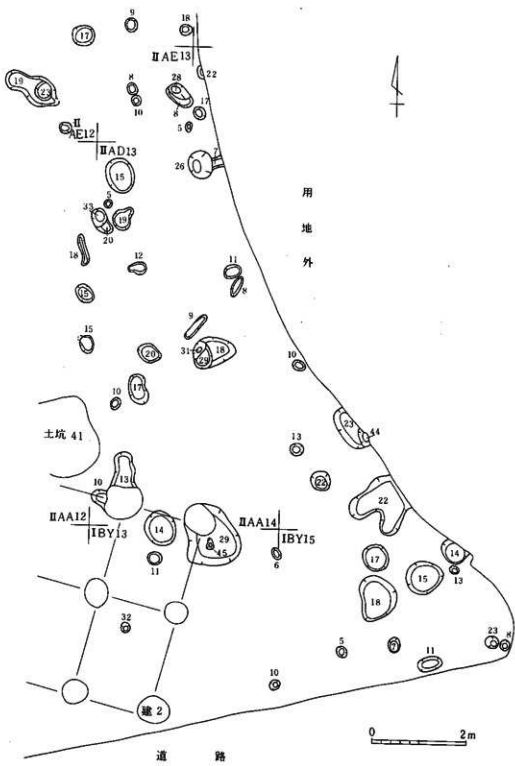


插图30 周边柱穴平面图⑩

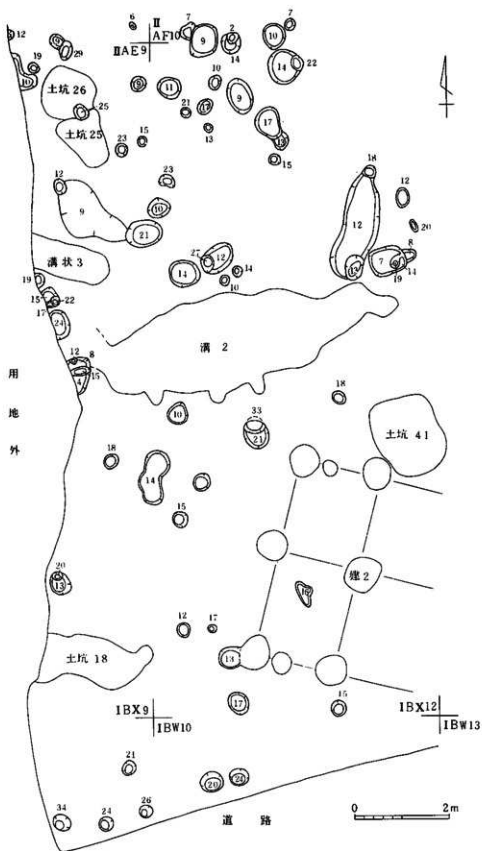


插图31，周边柱穴平面图(1)

IV 総 括

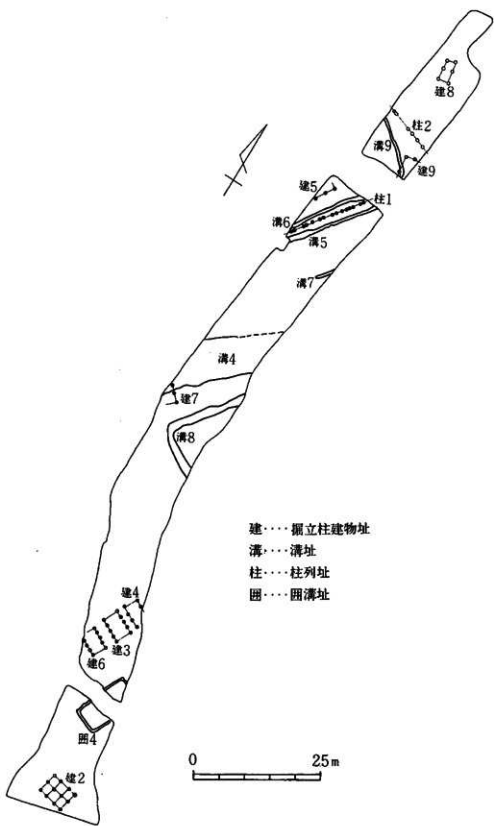
今次調査に着手する前、これまで調査された周辺地点の調査成果から、縄文時代中期から平安時代にかけての集落址の確認されることが予想された。しかし、調査遺構・遺物は本書の内容のとおりであり、様々な知見が与えられた。これらについて概観し、今次調査の総括としたい。

今次調査でまず目につくのは掘立柱建物址・柱列址および溝址である。限られた路線幅内での調査のため、各遺構の規模や配置、それに時代性を十分に把握することは困難である。しかし、掘立柱建物址1・3・4・5・6、柱列址1、溝址4～9、囲溝址4はほぼ方向が揃っており、相互に関連を有すると考えられる。(挿図32)。掘立柱建物址1は調査区外にかかって規模等が不明であるが、柱痕の残存径が26cmと大きく、相当大規模の建物址である。また、柱列址1は、少なくとも2回以上建て替えられており、両側に溝址5・6を伴うことから塀といった区画施設と考えられ、特に、近接する建物址5とは直接関連する可能性が高い。掘立柱建物址3・4・6は4間×1間、3間×1間と柱間を異にするが、ほぼ同規模で、3棟棟を揃えて並んでいる。溝址6・9は、現水路下で調査できず同一遺構であるか把握できなかったが、底部レベルが10～28cm異なるものの断面形や埋土の状態が類似しており、関連すると考えられる。溝址6・9同様、溝址8も鉤手になっており、区画のための溝と考えられる。また、溝址4・8は接合する遺物が多く、ほぼ同時期の遺構と考えられる。こうした状況から、これらの遺構群は、地方官衙関連の施設ないし豪族居館址あるいは寺院址の可能性があると考えられる。また、竅穴4・7をはじめとする湿地帯に面した遺構群は、土地利用のあり方、遺物の内容なども合せ、祭祀的な役割を果たした可能性が高いといえる。灰陶器碗の転用硯や火舎など特殊な遺物もあり、一般集落の内容にとどまらない。これまで当地方では、奈良・平安時代の寺院址に比定される地区内の上川路廃寺・前林廃寺の他、古瓦を出土した遺跡(棚田遺跡、古瀬平遺跡、恒川遺跡群、新井原・石行遺跡、毛賀御射山遺跡、上の坊遺跡)、金井原瓦窯址・堤洞瓦窯址が知られており、瓦を葺く寺院の伝統があったと考えられる。とすれば、今次調査で確認された遺構群については、古瓦の出土をみないことから、寺院址以外の施設である可能性が高いと考えられる。具体的には掘立柱建物址3・4・6といった梁間1間の建物址について建物規模なども勘察すると官衙もしくは豪族居館の倉庫・厩舎など主要建物の付属施設的な性格が考えられる。

8～10世紀、当地方における官衙的な遺跡は、座光寺恒川遺跡・松尾久井遺跡で大型の掘り方を有する掘立柱建物址群が確認されており、恒川遺跡は古代伊那郡衙址と判断され、久井遺跡は東山道に関する駅の推定地の1つと考えられている。

本遺跡で検出された方向を一にする建物等の配置状況は、官衙の様相を呈するといえるが、それぞれの建物等の柱掘り方は比較的小規模であり、主要建物が未確認であるが大型建物が通例である公的施設とは考え難い。仮に3棟の建物を厩舎とすれば、8世紀以降の東山道経営になんらかの形で関与した地方豪族の居館内の一施設と考えるのがより合理的であると判断される。また、溝址3・4の間隔は8mを測り、道路敷の可能性もあろう。

本遺跡では調査区の北側が湿地帯となっており、堆積環境の把握が本遺跡の形成過程に関わると考え



挿図32 主要遺構配置図

られ、また、遺跡周辺の森林植生や稲作の消長を含めた周辺の自然環境を検討するため自然科学的な分析調査を依頼した。面的に確認できなかったものの、Ⅷ層上面で畦畔と考えられる高まりが断面で観察され、イネ属機動細胞珪酸体の出現からⅧおよびⅨ層では水田層に相当する可能性が指摘された。Ⅸ層上面から掘り込まれた堅穴7・土坑34などが奈良時代に属することから、段丘直下の湿地帯を利用して、古墳時代後半期に水田経営の安定化・規模拡大が図られたといえる。こうした湿地帯の形成は、段丘崖下に湿地が形成される伊那谷の段丘地形と共通しており、調査地点西北側の小段丘を形成した断層活動に起因する可能性が指摘できる。

段丘崖直下は、基本的な地形形成後の一定期間は湧水帯として流水もしくは湛水状況にあったと考えられる。その後順次上位段丘面からの土砂供給により、湿地帯化を成し、それにより、一定規模の水田経営を成し得る状況をも作り上げ、その安定した時期を古墳時代に求めることができる。さらにそれに降のこの地における水田経営は、中世以降の大規模な用水開発までその規模の変化はなかったと考えられる。

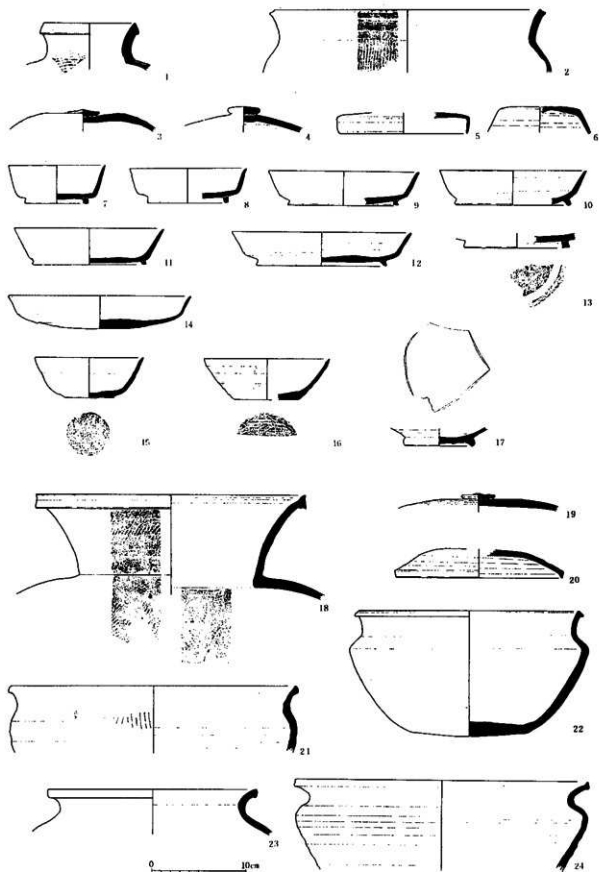
また、Ⅸ層上部より上位の花粉化石群集の分析結果では、ツガ属が多産し、マツ属が上位に向けて増加する特徴が指摘されている。樹種の同定は今回行っていないが、肉眼で観察したところでは、マツ・ヒノキが多いと考えられる。マツ属の急増について、人間の積極的な周辺植生への干渉が指摘されており、古墳時代後期以降当遺跡周辺において山林部分に至るまで旺盛な人々の活動があった様を裏付けるといえよう。なお、調査地点の北側200mの当小段丘から張り出した独特の占地をなす前方後円墳塚原1号古墳の築造もこの地における安定した水田経営と深い関わりを持っての結果と考えられる。さらに、この古墳の被葬者の後裔により、今次調査結果によりその一部が明らかになった建物群を配した居館形成があったことも十分に推測される。

竜丘地区には多数の古墳が築造されており、また、本遺跡を初め地区内の中・低位段丘上の遺跡は、飯田下伊那ばかりでなく日本の古代史に関わる重要な遺跡が多いと考えられる。しかし、調査地点周辺には記録もされずに消滅した古墳が数多くあったことも事実であるし、また、現在事業所等の進出・宅地化が急速に進行しつつあり、十分に保護策が講じられないまま、蚕食的に遺跡破壊がなされているのが現状である。それ故、なおさら文化財保護の本旨に則ったたゆまない活動が求められているわけで、そうした努力こそが、今次の調査成果を地域の歴史のなかに正しく位置づける方途であろう。

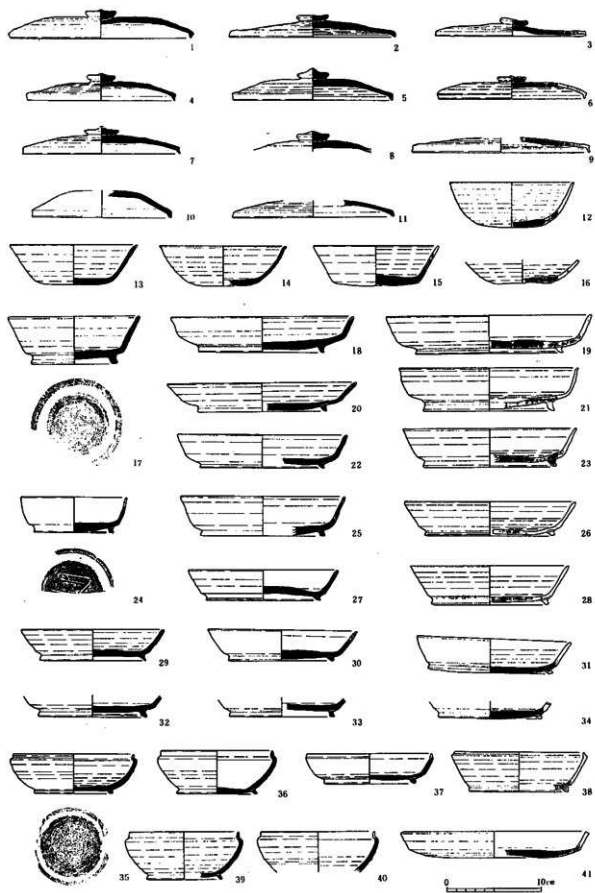
(小林正春)

〔引用・参考文献〕

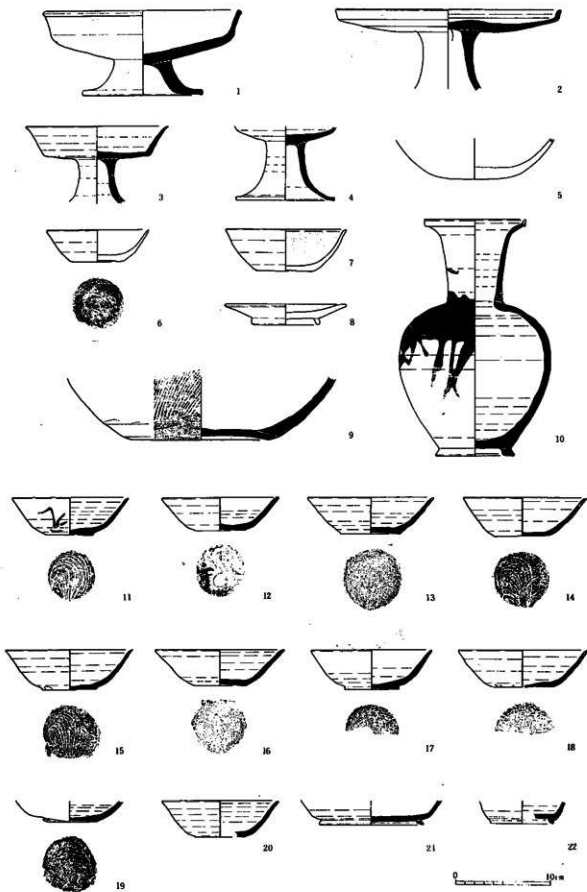
- | | | |
|-------------|------|--|
| 飯田市教育委員会 | 1968 | 『内山、花の木発掘調査報告書』 |
| 飯田市教育委員会 | 1974 | 『開善寺境内遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1974 | 『小池・宮城・神送塚』 |
| 飯田市教育委員会 | 1975 | 『前の原・塚原』 |
| 飯田市教育委員会 | 1976 | 『駄科北平遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『前の原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『鈴岡城址』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『開善寺境内遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『ガンドウ洞遺跡・飯田城跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1993 | 『久井遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1993 | 『三尋石(Ⅱ)遺跡・富士塚遺跡・中村中平遺跡・西の塚遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1994 | 『中村中平遺跡』 |
| 飯田建設事務所 | 1969 | 『安宅・大島』 |
| 石川正臣・伊坪達郎他編 | 1995 | 『図説 飯田下伊那の歴史』 郷土出版社 |
| 大沢和夫 | 1961 | 「前林発見の瓦塔について」 『伊那』 7月号 |
| 桐原 健・樋口昇一他編 | 1994 | 『信州の大遺跡』 郷土出版社 |
| 遠那真周 | 1966 | 「飯田市竜丘宮洞発見の埴仏」 『伊那』 4月号 |
| 下伊那教育会編 | 1985 | 『親と子の下伊那史』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第2巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第3巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1967 | 『下伊那史 第5巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1991 | 『下伊那史 第1巻』 |
| 下伊那誌編纂委員会 | 1984 | 『下伊那誌 第1巻 地質編』 |
| 下伊那地質誌編集委員会 | 1976 | 『下伊那の地質解説』 |
| 竜丘村誌編纂会 | 1968 | 『竜丘村誌』 |
| 長野県 | 1961 | 『重要文化財開善寺山門修理工事報告書』 |
| 長野県教育委員会 | 1990 | 『天竜川』 歴史の道調査報告書X X X |
| 長野県教育委員会 | 1992 | 『ギフチョウの保護活動と生息環境の保全 古墳の景観保存のための啓蒙
について』 |
| 長野県史刊行会 | 1983 | 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』 |
| 長野県史刊行会 | 1989 | 『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』 |



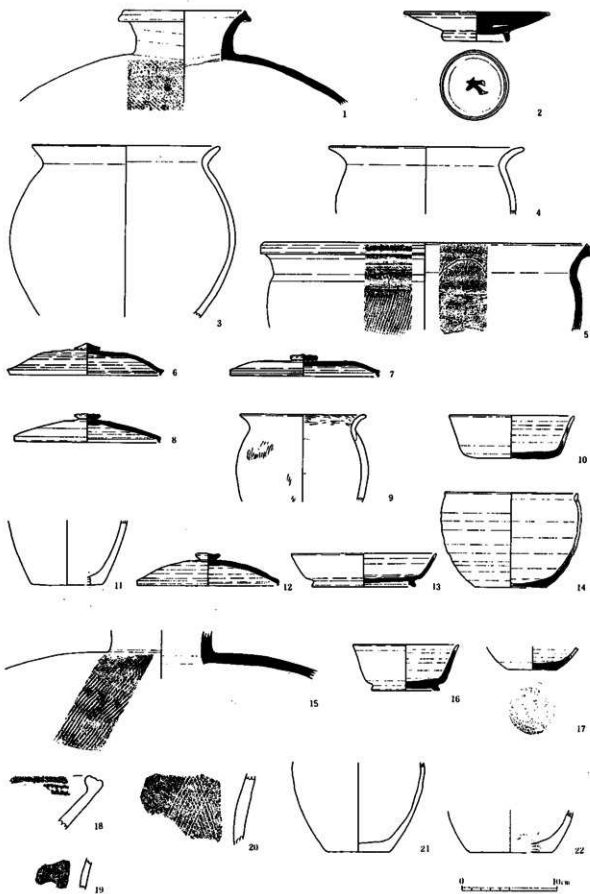
第1图 39号住居址 溝址4・8出土遺物



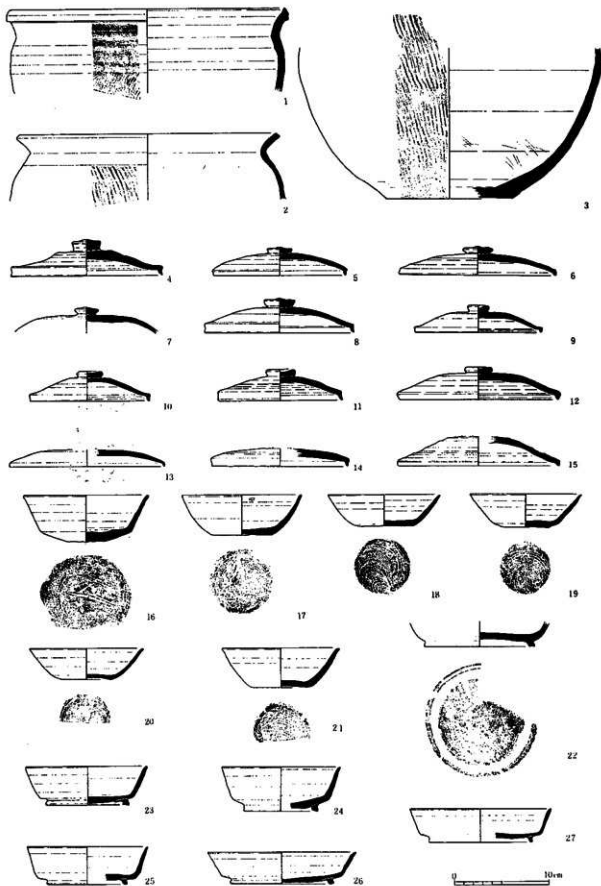
第2図 溝址8出土遺物



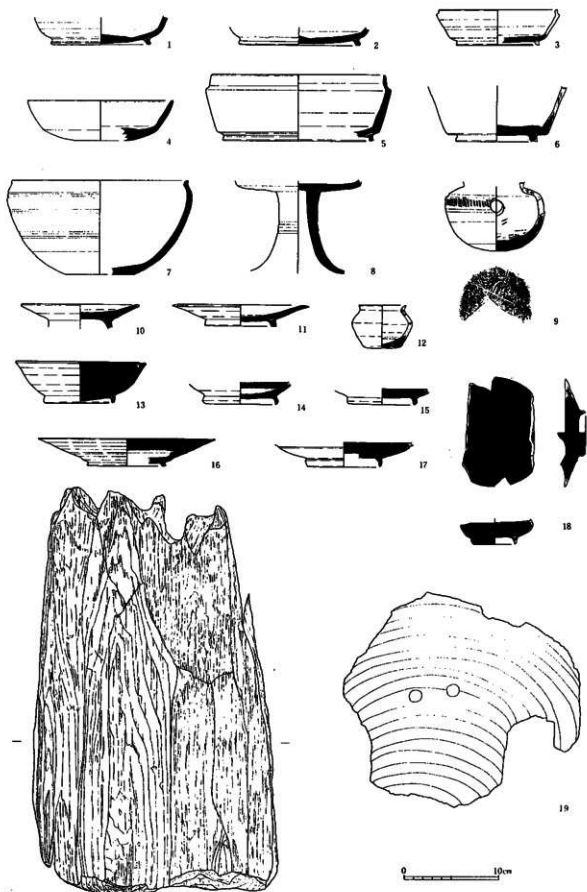
第3图 溝址8 竖穴4出土遗物



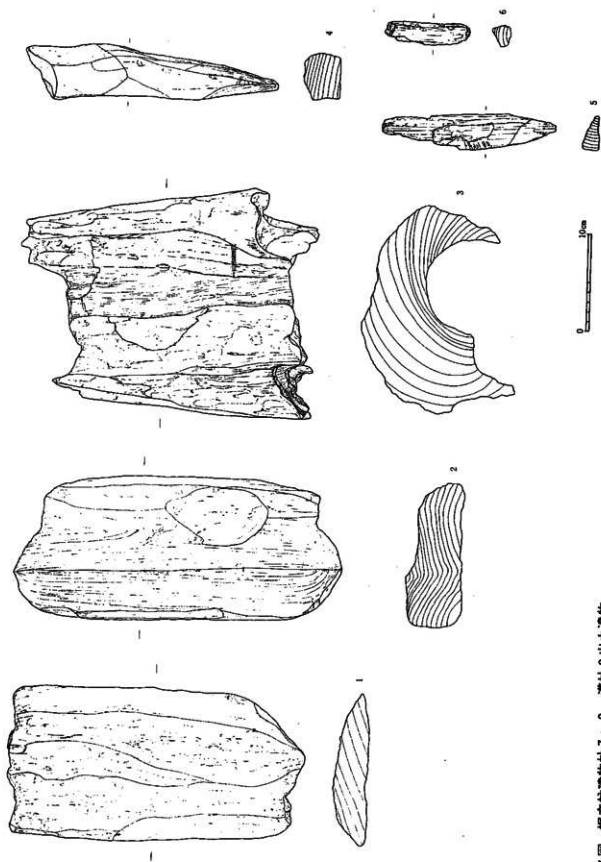
第4圖 竪穴4・7 土坑24・31・34・35・37 遺構外出土遺物



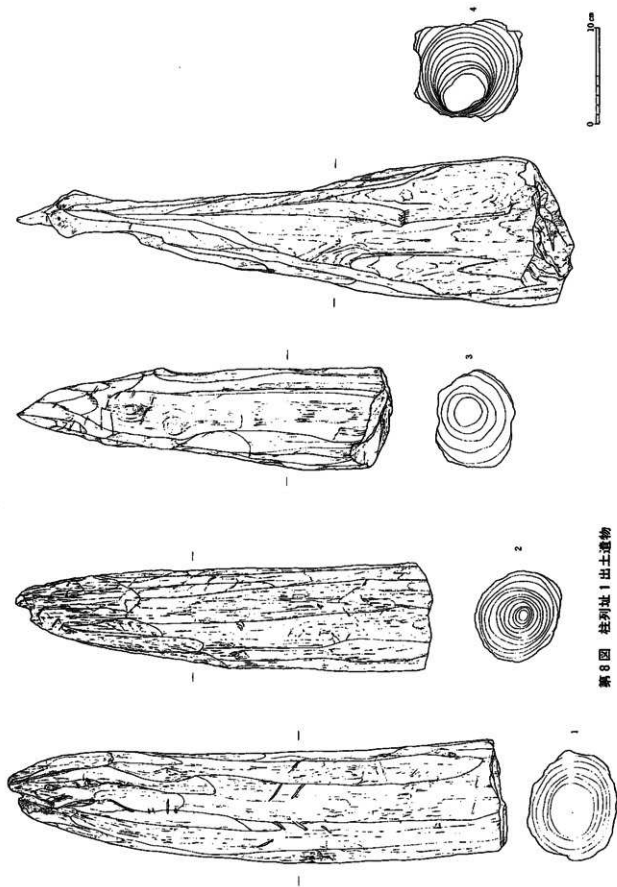
第5圖 遺構外出土遺物



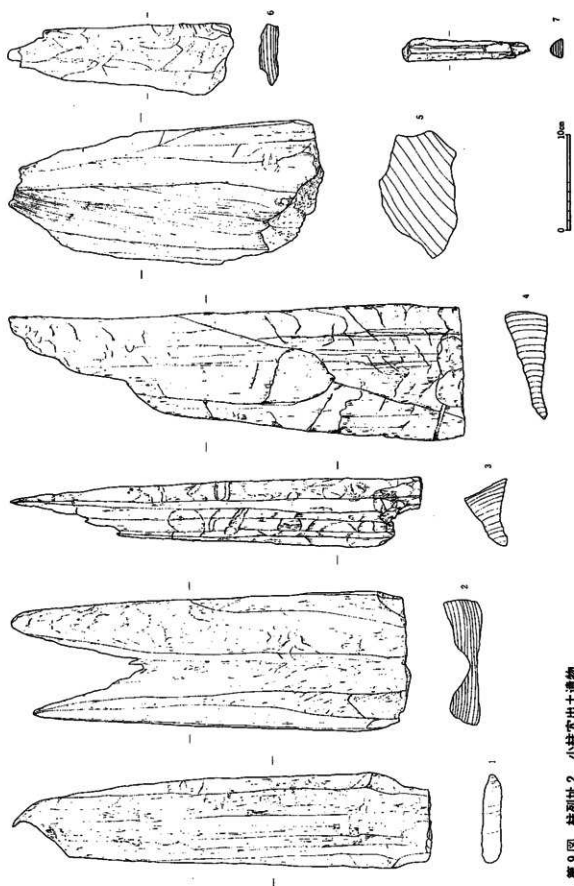
第6图 遺構外 据立柱建物址5出土遺物



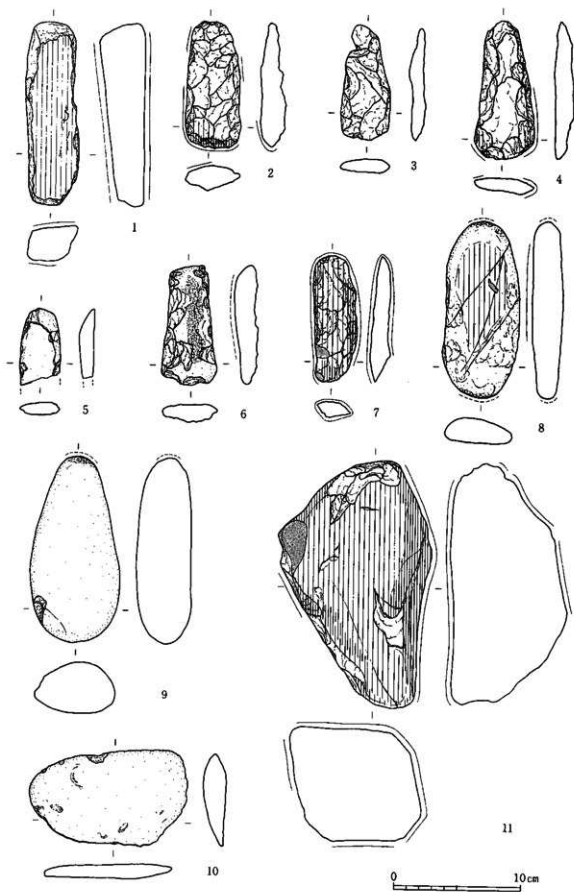
第7图 掘立柱遺物址7~9 溝址8出土遺物



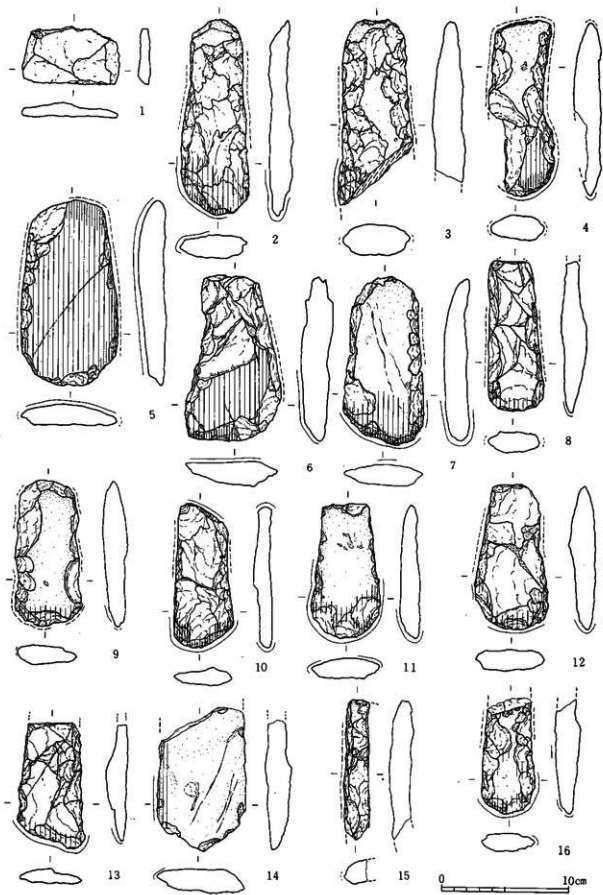
新石器时代出土骨器 图 8



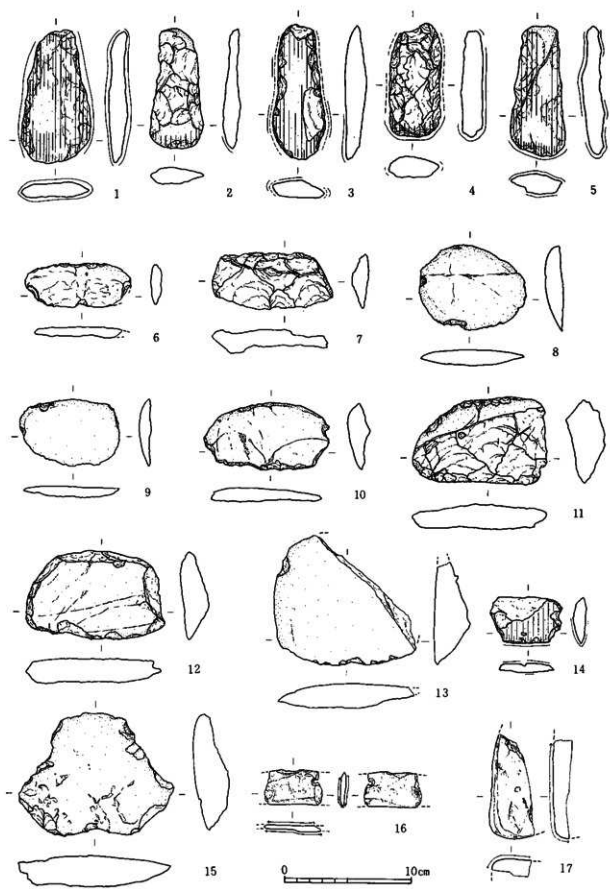
第9图 柱列址2 小柱穴出土遗物



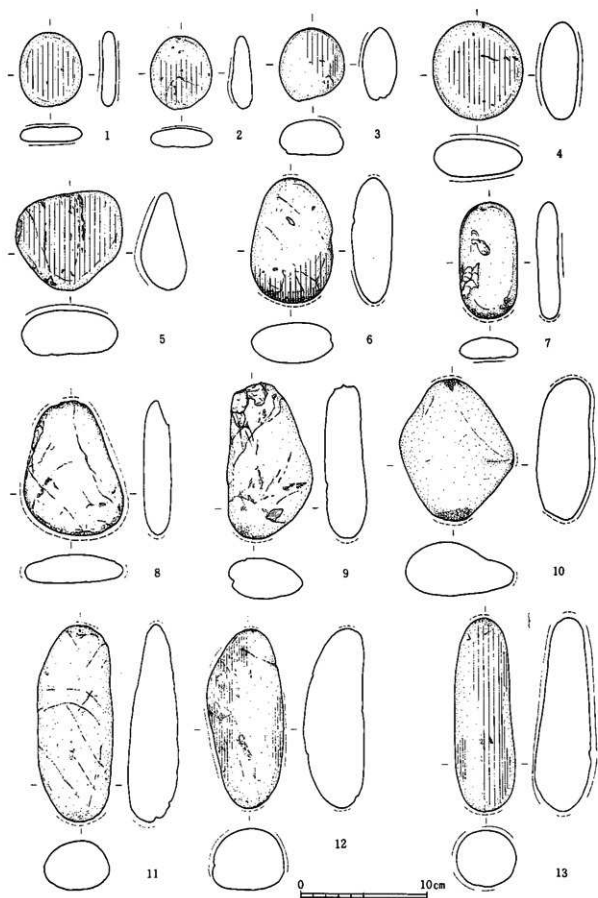
第10图 溝址2・5・8出土遺物



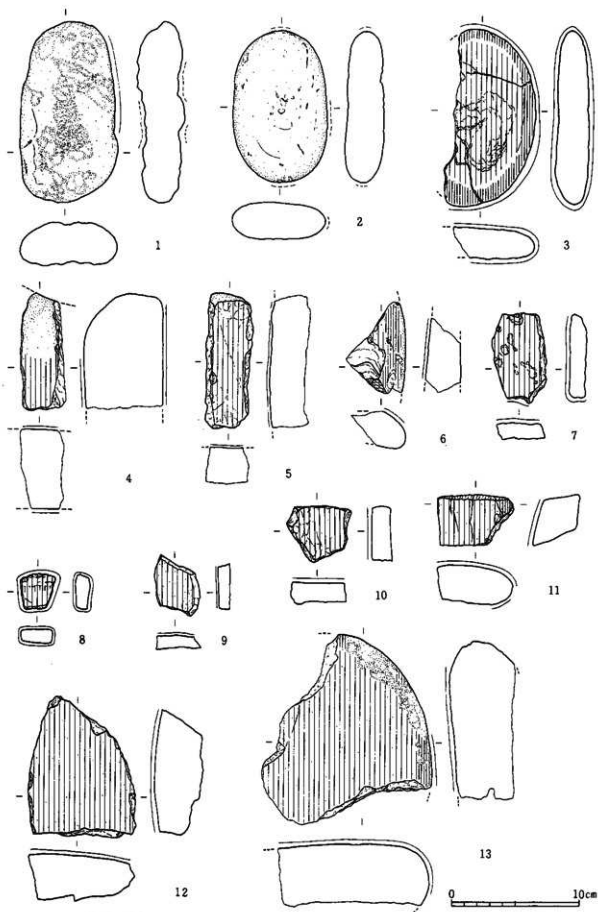
第11圖 土坑24 遺構外出土遺物



第12圖 遺構外出土遺物



第13圖 遺構外出土遺物



第14图 道標外出土遺物

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
1-1	39住	須恵器 横版	口 9.8 高 低	平行タキキ			石英多量	内 青灰 淡青灰 外 青灰	良
2	≒4	須恵器 甕	28.3	ロクロナデ タキキ目			石英少量	内 青灰 外 青灰	良
3	≒4	須恵器 蓋		ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英多量	内 青灰 外 青灰	良
4	≒4	須恵器 蓋		ロクロケズリ	ロクロナデ		石英少量	内 淡青灰 外 淡青灰	良
5	≒4	須恵器 蓋	13.6 2.15	自然軸	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 外 緑灰	良
6	≒4	須恵器 蓋		ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 外 青灰	良
7	≒4	須恵器 坏	10.3 4.05 6.75	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
8	≒4	須恵器 坏	12.45 3.7 8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 茶灰 ~青灰 外 青灰	良
9	≒4	須恵器 坏	16.0 3.6 11.8	ロクロナデ	ロクロナデ 火樫	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
10	≒4	須恵器 坏	15.6 3.65 11.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英微量	内 淡青灰 外 青灰	良
11	≒4	須恵器 坏	15.9 3.8 11.95	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	良 石英少量	内 青灰~ 明茶灰 外 同上	良
12	≒4	須恵器 坏	19.05 3.5 13.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良

表11 遺物観察表(1)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
1-13	≡4	須恵器 坏	口 高 11.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 高付台 窯印	良 石英少量	内 濃青灰 外 濃青灰	良
14	≡4	須恵器 盤	19.25 3.5 9.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	石英少量	内 明茶灰 外 淡灰～ 明茶灰	良
15	≡4	須恵器 坏	11.5 4.15 5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り ヘラナデ	石英多量	内 青灰 外 青灰	良
16	≡4	須恵器 坏	13.25 4.2 6.8	ロクロナデ 火澤	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
17	≡4	転用硯 灰輪碗	7.3	ロクロナデ 灰軸	ロクロナデ 灰軸	ロクロケズリ 付高台	良 石英微量	内 青灰 外 青灰	良
18	≡4 ≡8	須恵器 甕	28.65	平行叩き 自然軸	同心内叩き後 ナデ 自然軸		石英少量	内 灰色～ 緑灰 外 灰色～緑	良
19	≡4 ≡8	須恵器 蓋		ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英多量	内 青灰 外 青灰	堅
20	≡4 ≡8	須恵器 蓋	17.7 3.05	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		緻密	内 灰色 外 灰色	堅 緻
21	≡8	須恵器 甕	30.2	ロクロナデ タタキ後 ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 淡青灰 外 淡青灰	良
22	≡8	須恵器 甕	23.35 13.3 12.3	ロクロケズリ	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロケズリ	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
23	≡8	須恵器 甕	22.1	ロクロナデ タタキ後 ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 淡褐 外 淡褐	不良
24	≡8	須恵器 甕	31.1	ロクロナデ	ロクロナデ		良 石英ごく少量	内 淡青灰 外 淡青灰	やや 不良

表12 遺物観察表(2)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
2-1	≡8	須恵器蓋	口 19.0 高 3.0 低	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		良 石英多量	内 淡灰 外 淡灰～ 青灰	やや 不良
2	≡8	須恵器蓋	17.6 2.25	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		良 石英少量	内 灰褐 外 灰褐 ～青灰	やや 不良
3	≡8	須恵器蓋	15.9 1.75	ロクロナデ ロクロヘラケ ズリ	ロクロナデ		良 石英多量	内 青灰 外 青灰	良 歪み
4	≡8	須恵器蓋	15.7 2.85	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英	内 灰色 外 灰色	やや 軟
5	≡8	須恵器蓋	16.8 3.35	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英	内 灰褐 ～褐 外 同上	軟 質 歪み
6	≡8	須恵器蓋	15.45 2.35	ロクロナデ ロクロケズリ 粘土層付着	ロクロナデ		石英	内 灰色 外 灰色	堅
7	≡8	須恵器蓋	16.6 2.85	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英	内 褐色 外 灰色～ 褐色	堅
8	≡8	須恵器蓋		ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		良 石英少量	内 淡灰～ 明茶 外 淡青灰	やや 不良
9	≡8	須恵器蓋	18.8	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		良 石英少量	内 淡青灰 外 青灰	堅 緻 良
10	≡8	須恵器蓋	14.5	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 茶青灰 外 青灰	良
11	≡8	須恵器蓋	17.0	ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 黄茶～灰 外 黄灰 ～青灰	普通
12	≡8	須恵器 坏	13.0 4.9 7.3	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	緻密	内 灰色 外 灰色	堅 緻

表13 遺物観察表(3)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
2-13	≒8	須恵器 坏	口 13.4 高 4.2 底 8.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	石英多量	内 灰色 外 灰色	やや軟
14	≒8	須恵器 坏	13.5 4.2 6.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り ヘラナデ盤 形	良	内 青灰 ～紫灰 外 青灰	良
15	≒8	須恵器 坏	13.25 4.15 9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	石英少量	内 灰色 外 灰色	堅緻
16	≒8	須恵器 坏	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	石英	内 灰褐色 ～褐色 外 同上	軟質
17	≒8	転用硯 坏	18.85 5.0 8.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台 蓋印	粗大石英	内 灰青色 外 灰青色	良
18	≒8	須恵器 坏	19.35 3.7 13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台	石英	内 灰 外 灰	やや軟
19	≒8	須恵器 盤	21.6 3.98 15.55	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台	石英	内 褐色 外 褐色	良
20	≒8	須恵器 盤	19.95 3.0 13.75	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台	石英少量	内 灰色 外 灰色	不良軟
21	≒8	須恵器 盤	18.85 4.48 13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台	石英少量	内 灰色 外 灰色	歪み
22	≒8	須恵器 盤	17.9 3.5 13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナズ リ 付高台	石英少量	内 褐色 外 褐色	軟
23	≒8	須恵器 坏	18.3 4.1 14.0	ロクロナデ	ロクロナデ	転用硯 ロクロナズ リ 付高台	良 石英少量	内 淡青灰 外 淡青灰	良
24	≒8	須恵器 坏	11.15 3.65 8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後 ナデ付高台 ヘラ記号	緻密 きわめて良好	内 明灰～ 淡青灰 外 淡青灰	きわめて良好 堅緻

表14 遺物観察表(4)

図番号	遺構名	器種	法量(CM)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
2-25	≡ 8	坏	口 17.35 高 4.05 低 13.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	良 石英多量	内 青灰 外 青灰	良
26	≡ 8	須恵器 坏	18.0 3.5 13.75	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	緻密	内 灰色 外 灰色	軟
27	≡ 8	須恵器 坏	15.8 3.2 12.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英多量	内 灰色 外 灰色	堅
28	≡ 8	須恵器 坏	16.7 4.1 11.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	石英少量	内 茶青灰 茶 外 青灰	やや 不良
29	≡ 8	須恵器 坏	15.0 3.3 11.15	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 高台内 に火漉	石英多量	内 灰色 外 灰色	堅 緻
30	≡ 8	須恵器 坏	15.8 3.15 10.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 茶 外 淡黄茶 ~茶	やや 不良 歪み
31	≡ 8	須恵器 坏	16.3 3.55 12.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英ごく少量	内 青灰 外 青灰	良 歪み
32	≡ 8	須恵器 坏	11.35	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良 歪み
33	≡ 8	須恵器 坏	18.0 3.5 13.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	緻密	内 灰色 外 灰色	良
34	≡ 8	須恵器 坏	10.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	良 石英少量	内 淡褐 橙 外 灰褐	不良
35	≡ 8	須恵器 坏	12.7 4.17 8.25	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台 蓋印	石英少量	内 灰紫色 外 灰紫色	堅 緻
36	≡ 8	須恵器 坏	11.9 4.58 8.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	堅 緻

表15 遺物観察表 (5)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
2-		須恵器	口 13.25	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
37	≒8	杯	高 3.2 低 9.5			付高台			
38	≒8	須恵器 杯	13.65 4.2 10.4	ロクロナデ	ロクロナデ	付高台	石英少量	内 灰色 外 灰色	堅緻
39	≒8	須恵器 杯	11.6 5.0 8.0	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	良 石英少量	内 淡青灰 外 青灰 ~紫灰	良
40	≒8	須恵器 杯	12.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		良 石英ごく少量	内 青灰 紫灰 外 青灰	良
41	≒8	須恵器 盤	19.25 2.8 17.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	石英	内 褐色 外 灰褐	不良
3-		軟質須恵器	20.5				石英少量	内 灰褐 外 灰褐	不良
1	≒8	高杯	18.82 12.6						
2	≒8	須恵器 高杯	23.8	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英少量	内 灰白 外 灰白	軟
3	≒8	須恵器 高杯	15.2	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 外 青灰	良
4	≒8	須恵器 高杯	10.4	ロクロナデ ロクロケズリ			石英少量	内 青灰 外 青灰	良
5	≒8	土師器 費	6.0	ヘラ磨き	ナデ		石英	内 褐色 外 褐色 ~黒褐	良
6	タテ4	土師器 杯	10.9 3.3 5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 橙褐 外 橙褐	軟
7	タテ4	土師器 杯	12.8 4.3 6.0		ミガキ (内黒)	回転糸切り	石英	内 黒灰 外 灰褐	やや 不良

表16 遺物観察表 (6)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底 部	胎 土	色 調	焼 成
3-8	タテ4	土師器 皿	口 12.7 高 2.2 低 7.1	ミガキ	ミガキ (内黒)	ロクロケズリ 付高台	石英	内 黒 外 黒	良
9	タテ4	須恵器 甗	14.6	平行タタキ ロクロケズリ	タタキ後ナデ	ロクロケズリ	石英	内 青灰色 外 青灰色	良
10	タテ4	灰輪陶器 長頸瓶	10.6 24.65 8.2	ロクロナデ ロクロケズリ 灰輪	ロクロナデ	ナデ 脚付	石英少量	内 灰白 外 灰白 ～緑灰	良
11	タテ4	須恵器 坏	12.35 3.95 5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 灰暗 外 灰暗	やや軟
12	タテ4	須恵器 坏	12.35 3.5 5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り 墨書あり	石英	内 灰色 ～茶褐 外灰～青灰	普通
13	タテ4	須恵器 坏	13.4 3.9 6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 灰褐 外 灰褐 口縁一部褐	良
14	タテ4	須恵器 坏	12.95 4.05 5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 灰褐 外 灰褐	良
15	タテ4	須恵器 坏	13.5 4.2 5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 灰褐 外 灰褐	良
16	タテ4	須恵器 坏	13.7 3.8 5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 濃青灰 ～褐 外 同上	良
17	タテ4	須恵器 坏	12.8 4.15 5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英中量	内 青灰 外 青灰	良
18	タテ4	須恵器 坏	13.5 3.85 6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 灰色～ 濃青灰 外 同上	良
19	タテ4	須恵器 坏	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英中量	内 灰暗 外 灰暗	やや良

表17 遺物観察表(7)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底 部	胎 土	色 調	焼 成
3-20	タテ4	須恵器 坏	口 12.3 高 3.85 底 5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	石英	内 青灰 外 青灰	良
21	タテ4	須恵器 坏	11.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	緻密 石英少量	内 青灰 褐 外 青灰	良
22	タテ4	須恵器 坏	6.55	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	緻密 石英少量	内 褐 灰褐 外 褐	良
4-1	タテ4	須恵器 横瓶	12.95	平行タタキ (自然軸)	タタキ接ナデ (自然軸)		石英少量	内 黒褐 外 灰色 ~濃緑	良
2	タテ4	灰軸陶器 皿	15.1 3.05 6.6	ロクロナデ	ロクロナデ 軸刷毛掛け	ロクロケズリ 高台内 に墨痕あり	石英ごく少量	内 灰白 ~薄緑 外 灰白	良
3	タテ7	土師器 甗	19.8	ナデ	ナデ		石英少量	内 褐 外 褐	良
4	タテ7	土師器 甗	20.3	横ナデ	ヘラナデ		石英少量	内 褐 外 褐	良
5	タテ7	須恵器 甗	34.1	横ナデ 平行タタキ	横ナデ 同心円タタキ		石英少量	内 灰褐 褐 外 青灰	良
6	タテ7	須恵器 蓋	16.1 3.3	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 淡茶 ~褐 外 茶黒	良 焼 け 歪 み
7	タテ7	須恵器 蓋	15.7 2.2	ロクロケズリ ロクロナデ 割れ修復	ロクロナデ		石英少量	内 灰色 褐 外 灰色	良 焼 け 歪 み
8	下24	須恵器 蓋	15.4 3.0	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 褐 外 青灰	整
9	下31	土師器 甗	13.3	刷毛目	刷毛目ナデ		石英多量	内 灰褐 外 灰褐 ~褐色	不 良

表18 遺物観察表(8)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
4-10	ド31	須恵器 坏	口 13.1 高 4.5 低 10.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後 ヘラナデ	石英	内 灰色 外 灰色	軟質
11	ド34	土師器 甕	7.7				良 石英少量	内 淡褐 外 褐～明褐 ～赤褐	良
12	ド34	須恵器 蓋	14.9 3.4	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	良 石英少量	内 淡青灰 淡青灰 外 青灰	良
13	ド34	須恵器 坏	15.3 3.5 10.95	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台 火槽	良 石英少量	内 灰色 外 灰色	良
14	ド34	須恵器 鉢	14.0 19.9 7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	良 石英ごく少量	内 青灰 外 青灰	良
15	ド35	須恵器 横瓶		平行タタキ	タタキ後ナデ		石英ごく少量	内 灰色 外 灰色	堅緻
16	ド37	須恵器 坏	11.15 4.8 7.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	良 石英多量	内 青灰 外 青灰	良 堅
17	ド37	須恵器 坏	5.2	クロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英	内 青灰 外 青灰	良
18	遺構外	縄文中期 浅鉢		ミガキ	ミガキ		金雲母 石英	内 褐 外 褐	良
19	遺構外	弥生後期 甕		櫛歯波状文			石英	内 暗褐 外 暗褐	良
20	遺構外	埴輪		櫛歯文			石英多量	内 褐 外 褐	良
21	タテ7	土師器 甕	6.5	ナデ	ナデ		石英少量	内 褐色 外 褐色	良

表19 遺物観察表 (9)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土色	調	焼成
4-22	タテ7	土師器 甕	口高底 8.6		ヘラナデデ		粗大石英	内 褐色 外 褐色	良
5-1	遺構外	須恵器 甕	29.3	タタキ後ロク ロナデ ロク ナデ タタキ	ロクロナデ		良 石英ごく少量	内 青灰 外 青灰	良
2	遺構外	須恵器 甕	27.4	横ナデ 平行タタキ	タタキ後ナデ		石英少量	内 灰 外 灰	良
3	遺構外	須恵器 甕	13.5	平行タタキ	タタキ後ナデ	ナデ	石英	内 灰 外 灰~ 青灰	良
4	遺構外	須恵器 蓋	16.2 3.8	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 青灰 外 青灰	良
5	遺構外	須恵器 蓋	14.0 3.0	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 灰紫色 外 灰紫色	良
6	タテ7	須恵器 蓋	16.5 3.0	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 灰色 外 褐色	良
7	ミ8	須恵器 蓋		ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 白灰~ 淡青灰 外 淡青灰	良
8	遺構外	須恵器 蓋	15.85 3.6	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 灰色 ~灰黒 外 同上	良
9	遺構外	須恵器 蓋	13.35 2.8	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 外 青灰	良
10	遺構外	須恵器 蓋	12.7 3.15	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 青灰 外 青灰	良
11	遺構外	須恵器 蓋	13.0 3.25	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 青灰 外 青灰	良 堅

表20 遺物観察表 (10)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土色	調	焼成
5-12	遺構外	須恵器 蓋	口 16.8 高 3.35 底	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英少量	内 青灰 外 青灰	良
13	遺構外	須恵器 蓋	16.5	ロクロケズリ ロクロナデ	指押さえによる整形か轆線は不明瞭		石英	内 褐 外 青灰白 ~褐	不良
14	遺構外	須恵器 蓋	14.3	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 灰色 外 灰色	良
15	遺構外	須恵器 蓋	17.0	ロクロケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		石英	内 灰紫色 外 灰紫色	良
16	遺構外	須恵器 坏	13.3 4.9 9.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切切り 後ヘラナデ 窯印あり	石英	内 青灰 外 青灰	良
17	遺構外	須恵器 坏	12.6 4.2 6.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 青灰 外 青灰	普通
18	遺構外	須恵器 坏	11.9 3.2 6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
19	遺構外	須恵器 坏	11.8 3.45 5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
20	遺構外	須恵器 坏	12.2 3.3 5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
21	遺構外	須恵器 坏	12.4 4.2 6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	石英少量	内 灰 外 灰白	やや不良
22	遺構外	須恵器 坏	11.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台 刻書	良 石英	内 褐~ 淡褐 外褐~茶灰	不良
23	遺構外	須恵器 坏	12.95 4.1 8.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良

表21 遺物観察表(11)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
5-24	遺構外	須恵器 坏	口 12.6 高 4.7 底 7.9	ロクロナデ 黒い気泡のは じいたあと多	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英多量	内 青灰 外 青灰	不良
25	遺構外	須恵器 坏	12.9 3.95 8.4	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良 歪み あり
26	遺構外	須恵器 坏	15.7 3.35 10.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英少量	内 茶青灰 青灰 外 茶青灰	堅緻
27	遺構外	須恵器 坏	14.9 3.55 10.8	ロクロナデ	ロクロナデ 火漉	ロクロケズ リ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	堅緻
6-1	ミ3	須恵器 坏	10.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英少量	内 紫青灰 紫灰 外 紫青灰	良
2	遺構外	須恵器 坏	12.65	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英少量	内 淡青灰 外 淡青灰	良 焼歪み
3	遺構外	須恵器 坏	12.5 3.75 8.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	石英	内 青灰 外 青灰	堅緻
4	遺構外	須恵器 坏	15.4 4.2 12.05	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ	石英	内 灰色 外 灰色	不良 軟質
5	遺構外	須恵器 坏	18.3 6.85 15.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズ リ 付高台	緻密	内 灰色 外 灰色～ 灰黒	良
6	遺構外	須恵器 坏	8.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラナデ 付高台	石英少量	内 濃青灰 外 濃青灰	良
7	遺構外	須恵器 鉢	18.7 10.0 7.25	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズ リ	石英	内 褐～ 灰色 外 灰色	不良
8	遺構外	須恵器 高坏		ロクロケズリ			石英少量	内 灰白 外 灰白	普通

表22 遺物観察表 (12)

図番号	遺構名	器種	法量(cm)	外面特徴	内面特徴	底部	胎土	色調	焼成
6-9	6トレ	須恵器 甕	口高底 10.4	ロクロケズリ 自然軸	ヘラナデ ロクロナデ 自然軸	ヘラナデ 窯印	石英少量	内 灰白 青灰 外 灰白	良
10	遺構外	須恵器 皿	12.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ 付高台	石英多量	内 紫青灰 外 紫青灰	良
11	遺構外	須恵器 皿	14.5 2.2 7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 青灰 外 青灰	良
12	遺構外	須恵器 壺	5.0 4.5 3.0	ナデ	ナデ	ヘラナデ	緻密	内 灰白 外 灰白	良
13	遺構外	灰軸陶器 碗	13.6 4.3 7.3	ロクロナデ 灰軸	ロクロナデ 灰軸	ロクロケズリ 付高台	石英少量	内 緑灰白 外 灰白	良 歪みあり
14	遺構外	灰軸陶器 碗	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ 灰軸	糸切り 付高台	良	内 淡灰白 外 淡灰白	良
15	遺構外	灰軸陶器 皿	7.0	ロクロナデ 灰軸	ロクロナデ 灰軸	ロクロケズリ 付高台	緻密	内 灰色 外 灰色	良
16	遺構外	灰軸陶器 段皿	18.7 2.9 8.0	ロクロナデ	ロクロナデ 灰軸	付高台	石英少量	内 灰色 外 灰色	良
17	遺構外	灰軸陶器 段皿	7.7	ロクロナデ 灰軸	ロクロナデ 灰軸	付高台	緻密 石英	内 灰色 外 灰色	良
18	遺構外	灰軸陶器 耳皿	4.4	ロクロナデ 灰軸	ロクロナデ 灰軸	ロクロケズリ 付高台	粗い素地	内 灰白色 外 灰白色	良

表23 遺物観察表 (13)

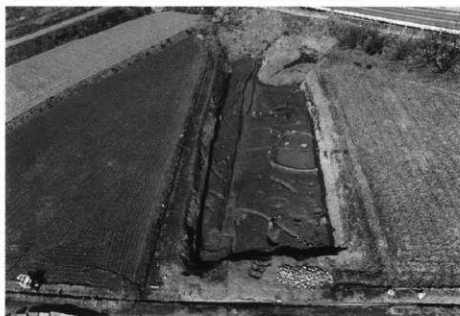


写真図版

図版 1



調査区南側全景



調査区北側全景



IB・IIA区遺構分布状況

IIA区(北から)



掘立柱建物址 2

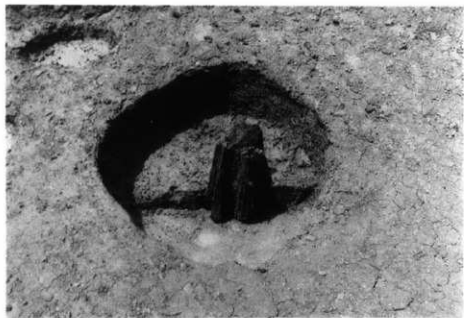


掘立柱建物址 3





掘立柱建物址 5・柱列址 1



掘立柱建物址 5 P 2



掘立柱建物址 6



掘立柱建物址 7



掘立柱建物址 7 P 1



掘立柱建物址 7 P 2



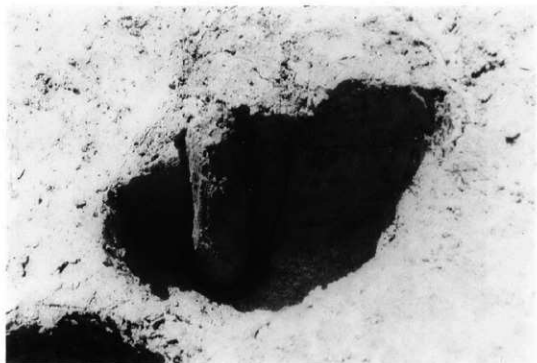
掘立柱建物址 8



掘立柱建物址 8P4



柱列址 1・掘立柱建物址 5



柱列址 1 P10



柱列址 2



图沟址 4



图沟址 5



沟址 8 · 土坑 31

豎穴 4



同上遺物出土状態



豎穴 5





土坑34



土坑35



III AW 6 P 1



重機作業風景



同上



発掘作業風景



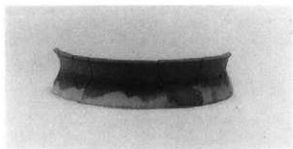
発掘作業風景



試掘調査風景



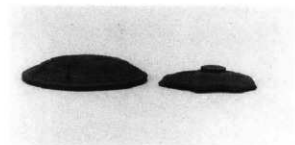
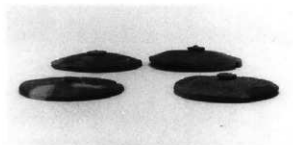
委託測量風景



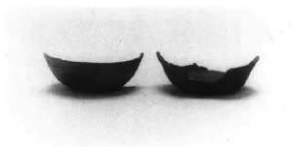
清址 4



清址 4 · 8



清址 8



溝址 8



竪穴 4



竖穴 4



竖穴 7



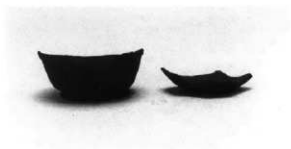
土坑24



土坑34



土坑35



土坑37



遺構外出土遺物

付編 安宅遺跡周辺の古環境変遷

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県飯田市安宅遺跡は、天竜川右岸の氾濫原上に位置する。本遺跡では、住居址・溝址・土坑・などの遺構が確認されている。

今回、本遺跡の堆積環境を検討するために珪藻分析を実施し、遺跡周辺の森林植生や稲作の消長を含めた周辺低地の植生を検討するために花粉分析・植物珪酸体分析を実施した。なお、分析点数は、珪藻分析が6点、花粉分析が10点、植物珪酸体分析が6点である。

1. 層序と試料

(1) 層序

本遺跡の基本層序は、11層に分層される。各層の層相は、10層がにぶい黄褐色シルト質粘土である。9層が黒褐色砂混じり粘土質シルト、8層が黄灰色砂質シルト、6層・4層が黒褐色砂質シルト、3層・1層が暗灰黄色～暗オリーブ褐色シルト質砂である。なお、発掘調査の結果、8層上面で畦畔らしき高まりが断面で確認されている。しかし、各層準の堆積年代については現時点では不明とされる。

なお、竪穴5床面から検出された炭化材3点について、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼し、放射性炭素年代測定を実施した。半減期は、LIBBYの5570年を使用した。その結果、放射性炭素年代測定値は、約1,800～1,500年前の年代値が得られた(表1)。したがって、竪穴5の構築年代は、弥生時代～古墳時代の頃に相当する可能性がある。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	年代 (1950年よりの年数)	Code No.
炭サンプル①	1,520±80 y.B.P.(A.D.430)	Gak-17581
炭サンプル②	1,600±80 y.B.P.(A.D.350)	Gak-17582
炭サンプル③	1,830±90 y.B.P.(A.D.120)	Gak-17583

(2) 試料

試料はⅢA区・ⅢB区の西壁断面の2ヶ所 (SP.A-SP.Bライン, SP.C-SP.Dライン) から5 cmで連続的に採取された。微化石分析試料は、堆積状況などを考慮してSP.C-SP.Dライン (試料番号62~30) から、各分析目的に応じて選択した (図1)。

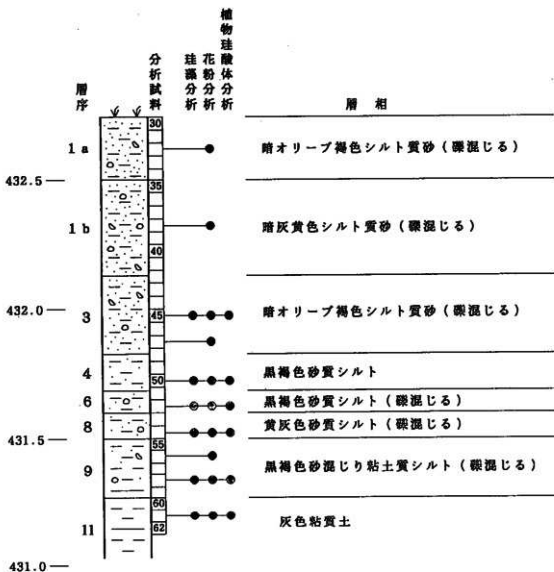


図1. 試料採取地点 (SP.C-SPライン) 模式柱状図

●:分析層位

2. 微化石分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水(H₂O₂)、塩酸(HCl)の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。同定結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986:1988:1991a,b)などを用いる。なお、珪藻の生態性について表2に示す。また、産出した化石がその場所で生きて死んだ現地性の化石か他の場所から運搬・堆積した異地性の化石かを判断する目安としている完形殻の出現率を求め、考察の際に参考とした。

表2. 珪藻化石の生態性

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性	生育環境(例)
海水生種:	強塩生態 (Polychaetobous)	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの	低塩度無層海域、塩水湖など
	真塩生態 (Euhalobous)	海産生種、塩分濃度40.0~30.0パーミルに出現するもの	一般海域 (ex 大塩層及び大鹽層以深の海域)
汽水生種:	中塩生態 (Mesohalobous)	汽水生種: 塩分濃度30.0~ 0.5パーミルに出現するもの	河口・内海・沿岸・塩水湖など
	弱塩生態 (Oligohalobous)	淡水生種: 塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・ 河川・川・沼沢地・泉)
塩分・PH・流水に対する区分		塩分・PH・流水に対する適応性	
塩分に対する適応性	真塩-好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの	高塩領域 (塩水湖上域・温泉・耕作土壌)
	真塩-不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
	真塩-嫌塩性種 (Halophobic)	少量の塩分にも耐えることができないもの	塩原・湿地・沼沢地
	広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水~汽水域
PHに対する適応性	高酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	塩原・湿地・火口湖 (酸性水域)
	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	塩原・湿地・沼沢地
	PH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水 (ex 湖沼・池沼・河川)
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの	
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく出現するもの	アルカリ性水域 (少ない)
流水に対する適応性	真止水性種 (Limnobiontic)	止水にのみ出現するもの	流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種 (Limnophilous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの緩やかな川
	流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの	河川・川・池・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerialhabitats) 水域以外の常に大気と曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の塩り光と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という	・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・木の腐葉で覆ったコケや石礫・苔上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の無明の当たりに生えたコケに付着

注: 塩分に対する区分は、Lowe (1974)、pHと流水に対する区分は、Hustedt (1937-38)による。

堆積環境の解析にあたっては、まず塩分濃度に対する適応性から産出種を海水-汽水-淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（PH）・流水に対する適応性について生態区分する。そして、産出率2%以上を示す分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水-汽水-淡水生種の比率と各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の出現率は淡水生種の合計を基数とした相対頻度で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体以下の試料における産出を示す。環境解析にあたっては、安藤(1990)の環境指標種群を参考とする。

(2) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について水酸化カリウム（KOH）処理、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）、フッ化水素（HF）処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出する。図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.6）による重液分離を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、○は1%未満を、+は短細胞珪酸体が200個体未満、機動細胞珪酸体が100個体未満の試料において検出した種類を示す。

3. 微化石の産状

(1) 珪藻分析

結果は、表3・図2に示す。珪藻化石は、試料番号45・58の2試料から統計的に扱えるだけ産出した。その他の試料では、珪藻化石が極めて少ない。また、珪藻化石の産出する試料の完形殻の出現率は、試料番号58が12%、試料番号45が45%である。産出種は全て淡水生種で、産出分類群数が19属73分類群(57種・13変種・種不明3種類)である。以下に個々の産出種の特徴を述べる。

試料番号58では、陸生珪藻の中でもとくに耐乾性の強い陸生珪藻のA群のHantzschia amphioxysが優占し、水域からも好気的環境からも認められる陸生珪藻のB群のNavicula confelvacea、陸生珪藻のA群のNavicula mutica、流水不定性で好塩性のRhopalodia gibberula、Pinnularia spp.が多産する。

試料番号45では、流水不定性のCymbella silesiaca、Gomphonema parvulum、Rhopalodia gibberulaが多産し、沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiiformis、Anomoeoneis brachysira、Gomphonema gracileを伴う。

(2) 花粉分析

結果は、表4・図3に示す。花粉化石は、試料番号61・58・54の3試料を除く7試料で検出される。花粉化石群集は、試料番号56~38と試料番号32で異なる。試料番号56~38では、ツガ属が最も高率に出現し、次いでマツ属が出現する。また、モミ属・クマシダ属-アサダ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属-ケヤキ属・ツツジ科などが随伴あるいは稀産する。これに対して、試料番号32では、マツ属が最も高率に出現し、ツガ属・スギ属・クマシダ属-アサダ属・ハンノキ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが出現する。

一方、草本花粉は、各試料ともイネ科が多産する。その他、サジメモダカ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・サナエタデ節-ウナギツカミ節・ソバ属・キカシグサ属・ヨモギ属・タンポポ科などが随伴あるいは稀産する。

(3) 植物珪酸体分析

結果は、表5・図4に示す。短細胞珪酸体は良好に検出されるが、機動細胞珪酸体は試料番号61を除く試料で良好に検出される。

植物珪酸体組成は、試料番号61と試料番号58~45で異なる。試料番号61では、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科短細胞珪酸体が多産する。試料番号58~試料番号45になると、タケ亜科短細胞珪酸体が減少し、栽培種のイネ属が増加する。イネ属機動細胞珪酸体の出現率は、約30~75%と高率である。その他、キビ族・ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などを伴う。

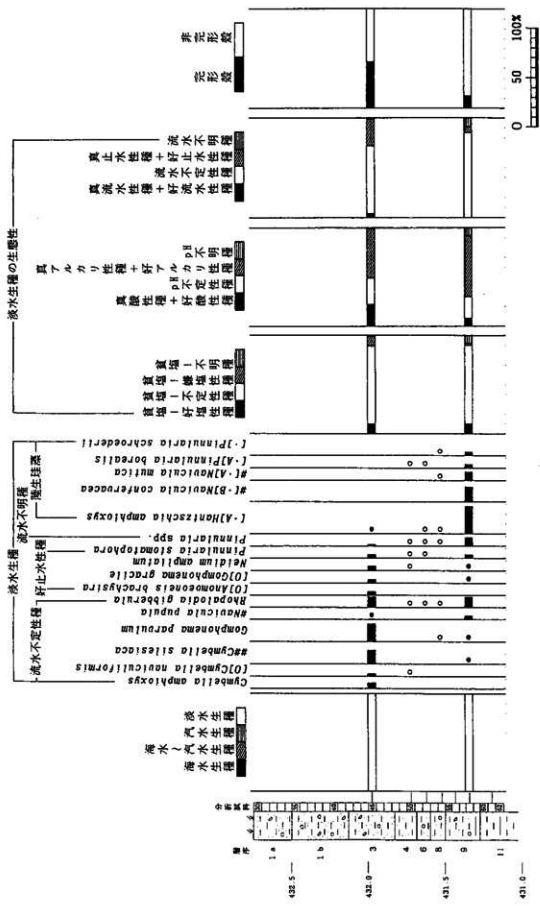


図2. 主要塩化石群の層位変化
 海水-汽水-淡水生種産出率、各種産出率、外形産出率は全体基數、淡水生種の生類性の比率は淡水生種の合計を基數として算出する。いずれも100個体以上検出された基數料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は10%個体未満の基數料における産出を示す。
 環境産出率群: [0]:汽水産出率; #:好汽水性種 (渡辺ほか, 1986)
 #:好汽水性種; #:好汽水性種 (渡辺ほか, 1986)
 [-]:淡水性種 ([A]:A群; [B]:B群; 伊藤・堀内, 1981)

表4. 花粉分析結果

種 類 (Taxa)	種 名									
	試料番号	1a	1b	3	4	6	8	9	10	
木 本 花 粉										
マキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
モミ属	3	2	4	6	9	3	-	6	-	-
ツガ属	24	69	86	81	113	95	6	95	6	-
トウヒ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属	125	23	62	41	46	50	-	23	-	-
コウヤマキ属	-	1	1	1	-	3	-	-	-	-
スギ属	21	11	5	1	3	2	-	1	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	6	1	3	2	1	-	-	2	-	-
ヤマモモ属	1	3	2	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属	-	2	-	3	1	-	-	-	-	-
クルミ属	2	3	1	-	1	1	-	1	-	-
クマシデ属-アサダ属	17	31	23	29	8	11	-	18	-	-
ハシバノ属	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
ハシバノ属	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-
ハシバノ属	19	24	8	16	3	6	-	11	-	-
ブナ属	1	11	5	10	4	2	-	11	-	-
コナラ属-コナラ亜属	18	17	14	15	14	12	-	16	1	-
コナラ属-アカガノキ属	6	5	3	2	2	1	4	5	1	-
コナラ属-セイヨウキ属	6	5	3	2	2	1	4	5	3	-
ニレ属-ケヤキ属	2	4	3	8	1	6	-	10	-	-
カラスザンショウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カウルシ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	2	1	1	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ属	-	2	5	2	1	1	-	5	-	-
イボタノキ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属-近縁	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	1	3	2	-	-	-	2	-	-
草 本 花 粉										
サジオモダカ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-
スズメ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	831	860	848	858	784	285	7	339	9	-
イカヤツリガサ科	13	31	149	61	38	35	-	43	2	-
ホシクサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ミズクサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	1	-	3	14	4	2	-	3	-	-
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	1	2	-	1	1	-	-	-	-	-
ギシギシ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ属-ウナギツカミ節	1	2	29	9	3	6	-	11	6	-
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	4	30	10	9	3	-	-	8	-	-
アカサ科	4	4	-	2	1	1	-	2	1	-
ナデシコ科	12	1	11	3	25	10	-	3	-	-
キンボウゲ科	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	9	-	1	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	3	1	3	-	-	-	-	-	-	-
キサシノガサ属	1	7	11	7	5	9	1	5	-	-
アリノトウグサ属	-	5	4	2	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	9	4	2	-	-	-	-	-
シソ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	-	1	6	-	-	-	-	1	1	-
マツツムシソウ属	-	4	15	1	-	-	-	3	-	-
キユウリ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キヨモギ属	1	7	26	14	52	53	-	10	-	-
他のキク科	3	4	2	6	2	2	-	3	-	-
タンポポ科	3	7	7	6	1	1	-	1	-	-
不明花粉	28	24	31	22	15	17	-	26	-	-
シダ類										
シダ類	23	35	126	59	101	103	22	139	19	20
合 計										
木 本 花 粉	250	219	239	239	219	201	6	209	8	0
草 本 花 粉	890	971	1138	1001	921	404	8	433	19	0
不 明 花 粉	28	24	31	22	15	17	0	26	0	0
シ ダ 類	23	35	126	59	101	103	22	139	19	20
總 計	1191	1249	1534	1321	1256	725	36	807	46	20

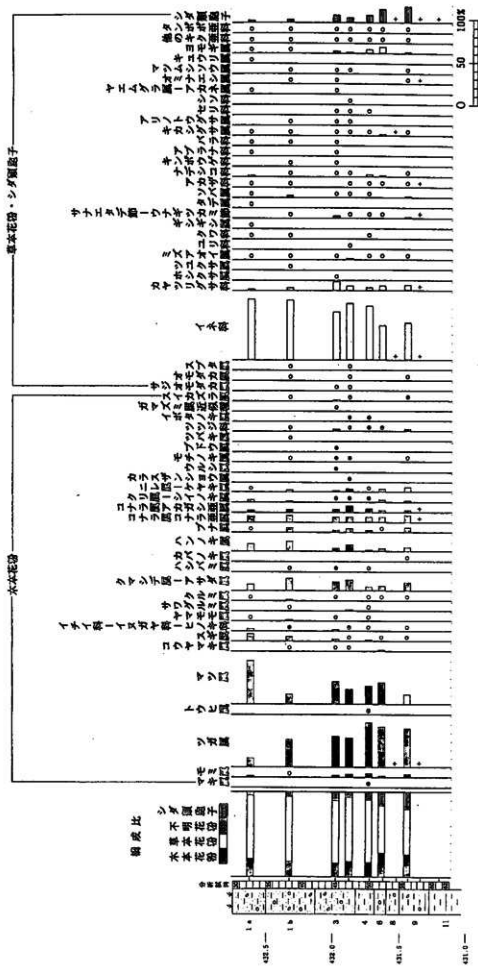


図3. 植物化石標本の組成
 出所等は、水本花節は水本花節地蔵を、草本花節・シダ類節子は総花外・節子類より不明花節を除いた数をそれぞれ基数として算出した。なお、◎は1%未満、+は水本花節100個体未満の基数において検出された種類を示す。

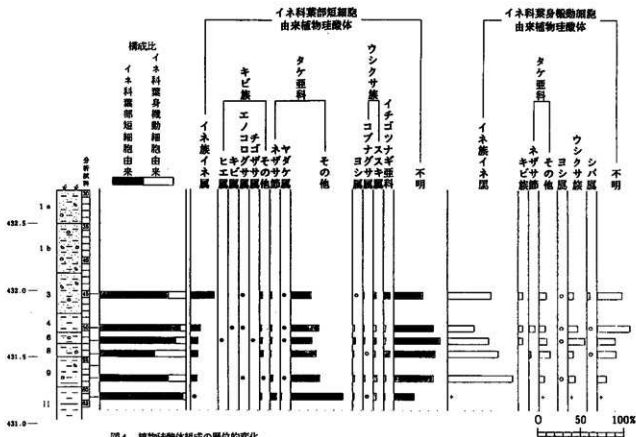


図4. 植物組織体組成の層位的変化

出現率は、短細胞組織体と細胞短細胞組織体の各組織体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を、+は短細胞組織体が200個体未満、細胞短細胞組織体が100個体未満の試料において検出した種類を示す。

表5. 植物組織体分析結果

層名		3	4	5	8	9	10
種 類 (Taxa)	試料番号	45	50	52	54	58	61
イネ科葉部短細胞組織体							
イネ属イネ属		108	146	64	17	26	4
キビ属キビ属		-	1	-	-	-	-
キビ属エノログサ属		1	2	-	-	2	-
キビ属チゴザサ属		-	-	2	-	-	-
キビ属(その他)		10	30	21	9	2	16
タケ属イネ属		7	24	13	3	13	45
タケ属イネ属		1	2	6	-	-	9
タケ属(その他)		90	449	181	61	133	397
ヨシ属		2	27	22	3	9	8
ウシクサ属コブナグサ属		4	15	12	1	8	1
ウシクサ属ススキ属		11	36	24	4	17	20
イネ科葉部短細胞組織体		29	32	13	15	9	8
不明キビ属		73	247	174	44	83	51
不明ヒゲシバ属		10	119	96	9	24	24
不明ダンチク属		49	256	138	48	72	74
イネ科葉身細胞由来植物組織体							
イネ属イネ属		53	33	47	73	80	4
キビ属キビ属		8	6	5	-	-	-
タケ属イネ属		-	8	-	2	-	-
タケ属イネ属		8	8	9	16	5	10
ヨシ属		1	1	1	-	1	-
ウシクサ属		6	12	19	8	8	2
シバ属		3	1	-	-	-	-
不明		29	41	20	26	11	8
合 計							
イネ科葉部短細胞組織体		395	1386	767	214	399	657
イネ科葉身細胞由来植物組織体		105	110	101	126	106	24
検 出 個 数		500	1496	868	340	505	681
組 織 片							
イネ属短細胞組織体		8	1	2	-	-	-
イネ属短細胞組織体		7	12	2	3	2	1
イネ科葉部短細胞組織体		-	-	1	-	1	-
イネ科葉部短細胞組織体		-	2	-	-	-	-
タケ属イネ属		1	1	-	-	-	-
キビ属短細胞組織体		1	1	-	-	-	-
不明短細胞組織体		2	-	-	-	-	-

4. 古環境について

(1) 低地の環境—稲作の検討も含めて—

10層が堆積した頃、本遺跡周辺の微高地では、ネザサ節・ヤダケ属などのササ類やウシクサ族ススキ属が生育していたと考えられる。なお、本層では、栽培植物とされるイネ属がわずかながら検出されているが、これは出現率が極端に低いことをみると上位からの落ち込みの可能性が高い。本層では、珪藻化石がほとんど検出されないため、堆積環境について検討することが不可能であった。

9層～1層が堆積した頃になると、周辺では主にササ類・ススキ類以外にもキビ族・イチゴツナギ亜科・シバ属などのイネ科草本類が繁茂していたと推定される。この他、カヤツリグサ科・サナエタデ節・ウナギツカミ節・ヨモギ属を含むキク科などが生育していたと推定される。なお、9層下部では、乾いた環境を指標する陸生珪藻が約60%と多産するが、珪藻化石の完形殻の出現率が約10%と極めて低い。したがって、9層下部は、乾いた場所の土壌が再堆積した可能性があるものの、詳細な検討が不可能である。3層では富栄養水域に一般的な流水不定性種や好塩性種が多産し、沼沢湿地付着生種群を伴う。このことから、3層は水生堆積したと推定され、周辺に富栄養で沼沢地のような水域環境が存在していた可能性がある。なお、9層下部・3層以外では、珪藻化石がほとんど検出されないため、堆積環境を検討することが困難である。

9層～3層では、栽培植物とされるイネ属が短細胞・機動細胞の2形態とも検出される。その出現率は、9層で既に高率である。また、6層より上位では初に形成される穎珪酸体も検出された。過去の稲作を検討する場合、稲作の集約度や耕作期間などによりイネ属珪酸体の出現率に差異がみとめられるが、現水田の耕作土を比較することが一つの指標になる。現水田耕土におけるイネ属機動細胞珪酸体の産状を調査した例として近藤(1988)がある。これによれば、イナワラ堆肥連用(8年間、500kg/10ha/年)の水田耕作土表層では、イネ属機動細胞珪酸体が16%であるとされている。これにしたがうと、本層準のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、現耕作土層の16%をはるかに越えている。したがって、本層準が堆積した頃、調査地点の周辺では稲作が行われていた可能性が高い。とくに8層では、畦畔など水田に関連する遺構も検出されていることから、当時水田が行われ試料採取地点は生産域であったと推定される。ところで、9層のイネ属珪酸体の出現率は、畦畔が検出された8層よりも高率である。このことを考えると、9層も水田層に相当する可能性がある。また、水湿地生植物のサジオモダカ属・オモダカ属・スブタ属・ホシクサ属・ミズアオイ属・キカシグサ属に由来する花粉化石が検出される。これらの種類は、いわゆる水田雑草となり得る種類であり、当時も水田内で雑草として存在していた可能性がある。なお、3層が堆積した頃になると、珪藻化石の産状から富栄養な水質が存在していたと推定され、イネ属の短細胞珪酸体・穎珪酸体が下位に比較して多産することから、稲作の様態が変化した可能性もある。ただし、これについては発掘調査所見や文献史料なども含めて総合的に検討する必要がある。

一方、9層より上位では、畑作植物とされるソバ属が検出されている。これより、本遺跡周辺では、ソバ栽培などの畑作も行われていたと推定される。また、1a層堆積時になるとキュウリ類などの栽培も行われていたのであろう。

(2) 森林植生

9層上部より上位の花粉化石群集は、ツガ属が多産し、マツ属が上位に向けて増加することが特徴である。この他、クルミ属・クマシテ属・アサダ属・ハンノキ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属—

ケヤキ属など検出される。ツガ属は、モミ属・スギ属などとともに温帯性の針葉樹に由来しているものと推定される。したがって、周辺にはツガ類を中心とした温帯性の針葉樹林が成立しており、これらに混じってブナ類・ナラ類・クリなどの落葉広葉樹が生育していたのであろう。また、クルミ・シデ類・ハンノキ・ケヤキの仲間などが比較的湿った場所に生育していた可能性がある。下位より増加傾向を示していたマツ属が1 a層で多産する。縄文海進最盛期以降、マツ属が増加・多産する現象は、日本各地で認められており、この原因が人間の直接的あるいは間接的な植生干渉が著しくなったことに由来するとされている(塚田, 1981)。ここでもマツ属の急増も人間が周辺植生に著しく干渉したため、マツ二次林や植林が増加したことを反映していると推定される。

木曾谷では、ヒノキを中心とする温帯性針葉樹林の発達過程について花粉分析により調査がなされている(酒井, 1979)。本地域では、ツガ類を中心とした温帯性針葉樹である。この要因は、降水量の差など気候的な要因、地形・土地条件などに起因しているかもしれない。なお、現時点では、基本層序の堆積年代や遺構構築年代などが不明確である。したがって、今回時代時期を考慮して解析を行うことはできなかったが、今後整理調査が進み、堆積層・遺構の時代性が明らかになったときに再検討する必要がある。

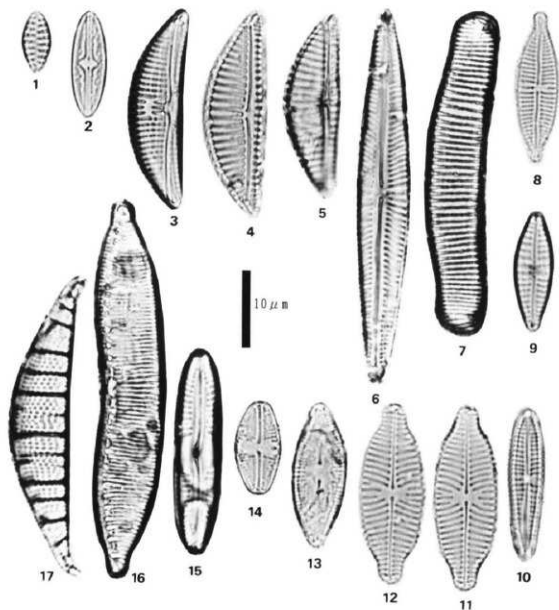
<引用文献>

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I~III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15;p.131-809, 16;p.1-155, 274-394.
- Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands. 2.Teil. Rabenhorst's Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Bd.7. p.845.
- 近藤鎌三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 近藤鎌三(1988)十二遺跡土壌の植物珪酸体分析. 「鋤師屋遺跡群十二遺跡 -長野県北佐久郡 御代田町十二遺跡発掘調査報告書-」, p.377-383. 御代田町教育委員会.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986・1988・1991a,b) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2(1・2・3・4):p.1-876,p.1-585,p.1-576,p.1-437.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻, 6, p.23-45.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p.1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 酒井潤一(1979)木曾ヒノキ林の花粉分析・層位等の研究調査報告書. 木曾ヒノキに関する総合調査報告書, P.1-31, 長野営林局.
- 塚田松雄(1981)過去一万二千年間-日本の植生史 II. 新しい花粉書. 日本生態学会誌, 31, p.201-215.

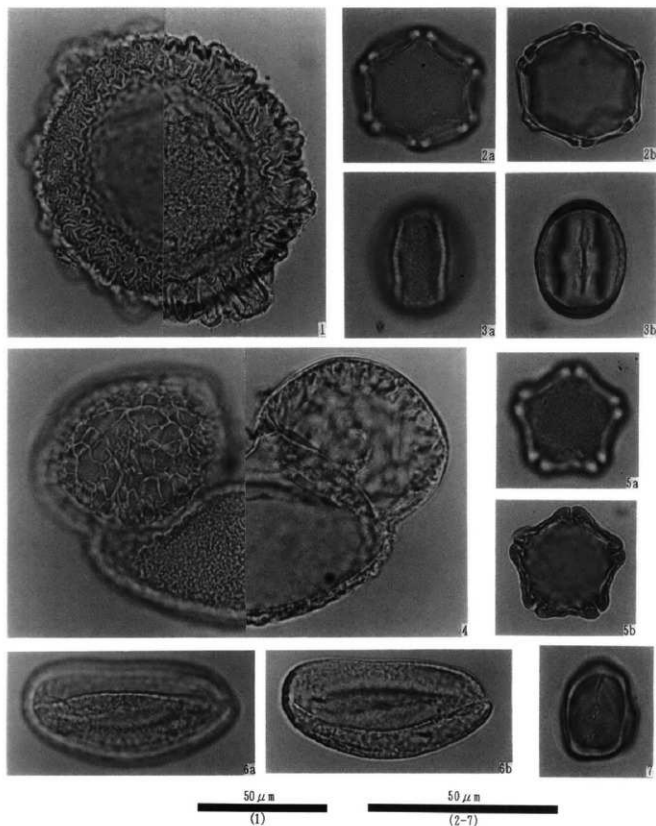
渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視(1988)珪藻群集による有機汚濁指数(DA I po)の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, p.765-773.



图版1 硅藻化石



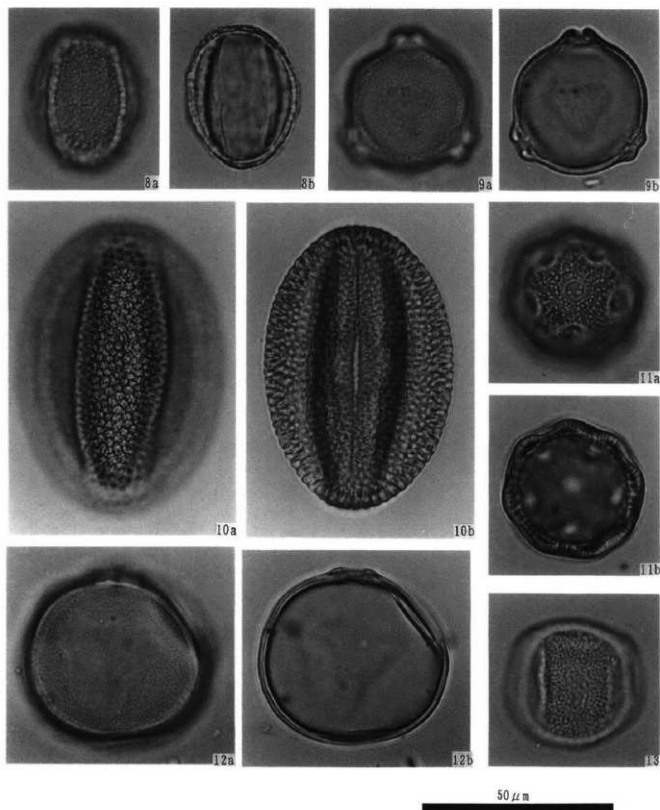
1. *Fragilaria construens* var. *venter* (Ehr.) Grunow (3層: 試料番号45)
2. *Anomoeneis brachysira* (Breb.) Grunow (3層: 試料番号45)
3. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (3層: 試料番号45)
4. *Cymbella silesiaca* Bleisch (3層: 試料番号45)
5. *Cymbella silesiaca* Bleisch (3層: 試料番号45)
6. *Cymbella amphioxys* (Kuetz.) Grunow (3層: 試料番号45)
7. *Eumotia praerupta* Ehrenberg (9層: 試料番号58)
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (3層: 試料番号45)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (3層: 試料番号45)
10. *Gomphonema pumilum* (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot (3層: 試料番号45)
11. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (3層: 試料番号45)
12. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (3層: 試料番号45)
13. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (9層: 試料番号58)
14. *Navicula mutica* Kuetzing (9層: 試料番号58)
15. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (9層: 試料番号58)
16. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (9層: 試料番号58)
17. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (3層: 試料番号45)



1. ツガ属 (1b層: 試料番号38)
3. コナラ属アカガシ亜属 (3層: 試料番号47)
5. アリノトウグサ属 (1b層: 試料番号38)
7. キカシグサ属 (1b層: 試料番号38)

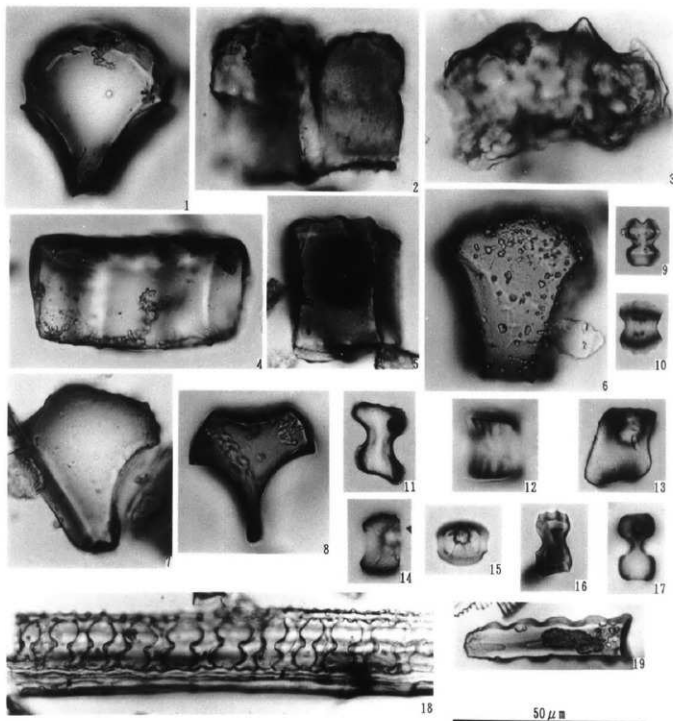
2. ハンノキ属 (1b層: 試料番号38)
4. マツ属 (1b層: 試料番号38)
6. ミズアオイ属 (3層: 試料番号47)

図版3 花粉化石



8. コナラ属コナラ亜属 (1b層：試料番号38)
 10. ソバ属 (試料番号45)
 12. イネ科 (1b層：試料番号38)

9. クマシデ属—アサダ属 (1b層：試料番号38)
 11. ナデシコ科 (1b層：試料番号38)
 13. カヤツリグサ科 (3層：試料番号45)



- | | |
|--|--|
| <p>1. イネ属機動細胞珪酸体 (3層: 試料番号45)
 3. イネ属短珪酸体 (4層: 試料番号50)
 5. ネザサ属機動細胞珪酸体 (8層: 試料番号54)
 7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (6層: 試料番号52)
 9. イネ属短細胞珪酸体 (3層: 試料番号45)
 11. キビ族短細胞珪酸体 (6層: 試料番号52)
 13. ヤダケ属短細胞珪酸体 (10層: 試料番号61)
 15. ヨシ属短細胞珪酸体 (9層: 試料番号58)
 17. ススキ属短細胞珪酸体 (6層: 試料番号52)
 19. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (3層: 試料番号45)</p> | <p>2. イネ属機動細胞珪酸体列 (9層: 試料番号58)
 4. キビ族機動細胞珪酸体 (4層: 試料番号50)
 6. タケ亜科機動細胞珪酸体 (6層: 試料番号52)
 8. シバ属機動細胞珪酸体 (3層: 試料番号45)
 10. チゴササ属短細胞珪酸体 (6層: 試料番号52)
 12. ネザサ属短細胞珪酸体 (10層: 試料番号61)
 14. タケ亜科短細胞珪酸体 (8層: 試料番号54)
 16. コブナグサ属短細胞珪酸体 (9層: 試料番号58)
 18. イネ属短細胞珪酸体列 (4層: 試料番号50)</p> |
|--|--|

報告書抄録

ふりがな	あだか いせき
書名	安宅遺跡
副書名	県道駄科大瀬木線道路改良事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地安宅遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林正春・馬場保之
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 Ⅱ 0265-53-4545
発行年月日	西暦1995年3月 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あだか いせき 安宅遺跡	いいたし 飯田市 駄科 1282	2053		35度 28分 30秒	137度 50分 00秒	平成4年 7月6日 ～ 平成5年 2月24日	3,400㎡	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
あだか いせき 安宅遺跡	集落址	奈良時代 ～ 平安時代	竪穴住居址 1軒 掘立柱建物址 8棟 柱列址 2 溝址 11条		土師器・須恵器 建物址等の柱痕 礎板	官衙ないし寺院に 関連すると思われる遺構		

あ だ か い せ き
安 宅 遺 跡

県道駄科大瀬木線改良工事に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1995年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会
印刷 飯田共同印刷 御

the 1990s, the number of people in the UK who are employed in the public sector has increased from 10.5 million to 12.5 million, and the number of people in the public sector who are employed in health care has increased from 2.5 million to 3.5 million (Department of Health 2000).

There are a number of reasons for the increase in the number of people employed in the public sector. One reason is that the public sector has become a more important part of the economy. Another reason is that the public sector has become a more attractive place to work. A third reason is that the public sector has become a more important part of society.

The increase in the number of people employed in the public sector has led to a number of changes in the way that the public sector is organized. One change is that the public sector has become more decentralized. Another change is that the public sector has become more customer-oriented. A third change is that the public sector has become more competitive.

The changes in the way that the public sector is organized have led to a number of challenges for the public sector. One challenge is that the public sector has become more complex. Another challenge is that the public sector has become more expensive. A third challenge is that the public sector has become more difficult to manage.

The challenges facing the public sector have led to a number of reforms. One reform is that the public sector has become more privatized. Another reform is that the public sector has become more restructured. A third reform is that the public sector has become more reformed.

The reforms have led to a number of changes in the way that the public sector is organized. One change is that the public sector has become more decentralized. Another change is that the public sector has become more customer-oriented. A third change is that the public sector has become more competitive.

The changes in the way that the public sector is organized have led to a number of challenges for the public sector. One challenge is that the public sector has become more complex. Another challenge is that the public sector has become more expensive. A third challenge is that the public sector has become more difficult to manage.

The challenges facing the public sector have led to a number of reforms. One reform is that the public sector has become more privatized. Another reform is that the public sector has become more restructured. A third reform is that the public sector has become more reformed.